



人間が思考を巡らせる時、その脳殻の内に張り巡らされた神経細胞…ニューロンの隙間からは、極めて微弱な電波が絶えず漏れ出している。

それは一個体を見れば、宇宙の背景放射よりもかすかな、取るに足りない電氣的ノイズに過ぎない。しかし、地表を埋め尽くす数百億の人間が同時に呼吸し、怯え、願い、呪う時、その漏洩した電波は目に見えない大気のように重なり合い、干渉し合い、やがて巨大な定常波を形成していく。

かつて、人々はその波のうねりが現世の輪郭を歪めて生み出したものたちを、幽霊と呼び、妖怪と呼び、モノノ怪と呼び、あるいは神と呼んで畏怖した。

世界がまだ薄暗く、夜の闇が物理的な質量を持っていた時代、怪異は共同体の境界に、深い森の奥に、名もなき古い海の底に、確かにその座を占めていた。

やがて科学という名の強烈な照明が地表を照らし、人間がそれら「名付け得ぬもの」を忘れかけた頃、世界は新たな神経網によって覆い尽くされることになった。地球の肌を這うように敷設された光ファイバー、虚空を飛び交う無数の無線信号、あらゆる生活を調律する電子ネットワーク。

奇妙な反転が起こったのは、その時だった。

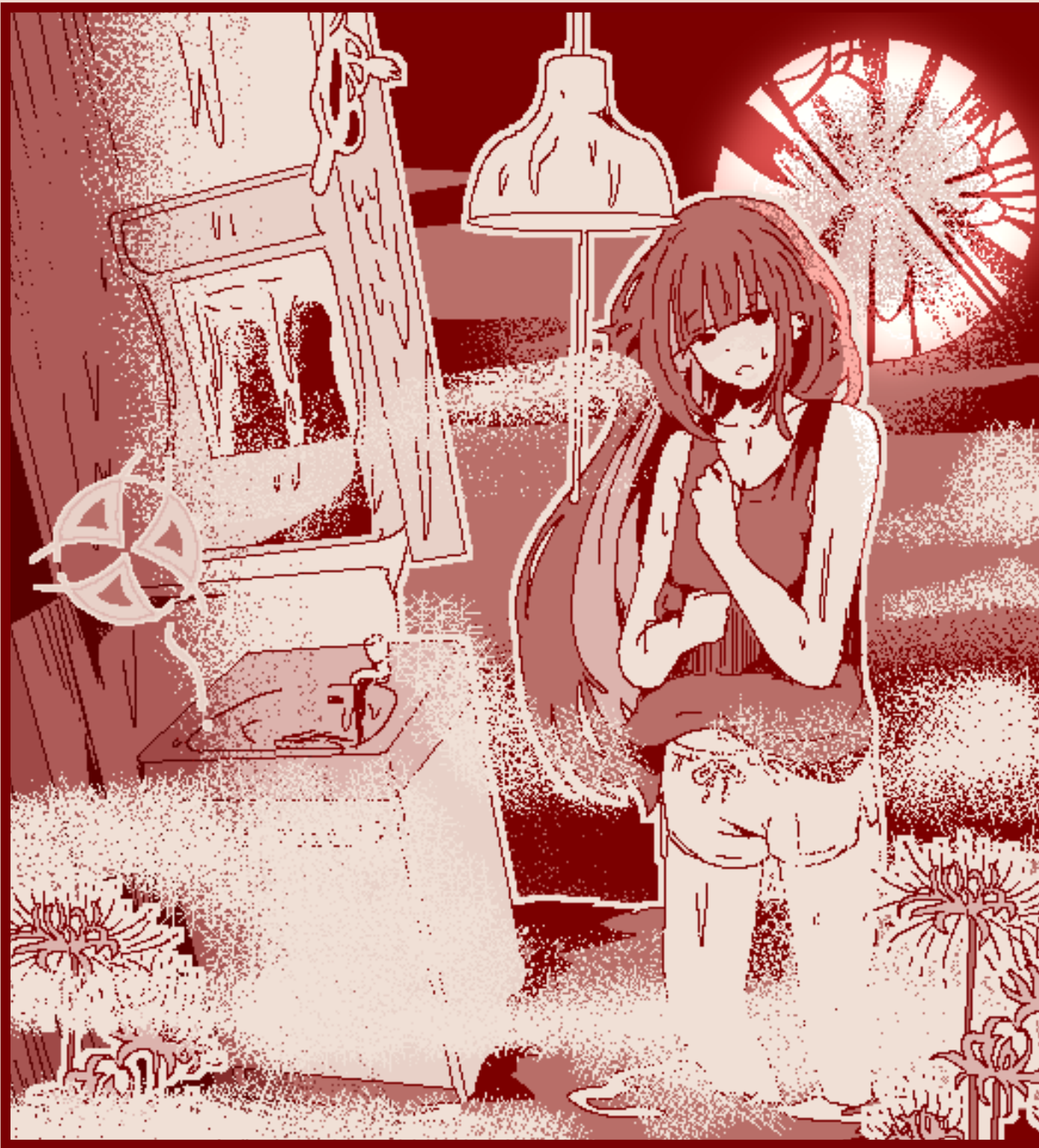
人間の脳から漏れ出す電波の定常波は、地上を覆った電子の特性と完全に同期し、その電腦空間の中に、かつてないほど強固で鮮明な肉質を獲得し始めたのだ。人工知能を持った電子のウイルスが、ネットワークの深層で数多の概念を捕食し、姿を変え、生き物のように進化していく。

生物でありながら、その構成原理は純然たるデータとプログラム、そしてネットワークそのものに属する生命体。

現代の記述者はそれらを「デジタルモンスター」、あるいは「デジモン」と呼ぶ。

彼らは突如として現れた最先端の産物ではない。その本質は、かつて民俗学の境界線上で囁かれていた、あの古き怪異そのものなのだ。現実の動物や植物、あるいは神仏や悪魔のモチーフをその身に纏いながら、彼らは知性を持ち、感情を震わせ、時に災害として、時に神話的な守護者として、人間のすぐ隣にある皮膚の裏側で息を潜めている。

これは、その電子の網の隙間から、取り返しのつかない古い海の色が滲み出してしまった、ある夏の記録である。



京都府、赤牟市…王港町。
八月の朝は、網膜を焼灼するような暴力的な白光に支配されていた。
開け放たれた窓から滑り込む海風が、むせ返るような熱を孕んで古い木造家屋の廊下を通り抜けていく。
遠くの木立から降り注ぐ蟬時雨が真夏の日差しをさらに焦がしていた。
しかし、強い光が落ちる分だけ、建物の隙間や廊下の隅には、墨を流し込んだような濃く不気味な影が澱んでいた。
「遥、朝ごはんできてるえ。」
台所の奥から届く祖母の柔らかな声に、渚遥は洗面台の鏡を見つめたまま、短く応じた。
「ん、今行くわ。おばあちゃん、先食べていて。」
無防備な寝間着姿のまま、遥は裸足の裏に伝わる古い板間の温もりを感じていた。
室内であっても、息を吸い込めば濃密な夏の湿気が肺を満たし、皮膚の表面にまとわりつく。
その時、足首にひやりとした滑らかな感触が触れた。
視線を落とすと、緑色の背びれを持った両生類のようなデジモンであるベタモンが、床の板目に腹を擦り付けるようにして身を振らせていた。
「遥、今日海行くか？行くよな!」
「こら、ベタモン。…せわしないわ、ご飯食べてから考えるは。」
呆れたようにたしなめながら、遥は洗面台の蛇口に手を伸ばした。
蛇口をひねると、勢いよく吐き出された水道水が白い陶器のボウルを甲高く打ち、両手に水をすくい、顔を洗う…首筋に冷水を這わせた、その瞬間だった。
陶器を打つ水音が、一瞬にして世界から消去された。
先ほどまで鼻腔を満たしていたはずの香ばしい出汁の優しい香りが、跡形もなく消え失せている…代わりに肺の奥まで侵入してきたのは、ひどく濃密で粘り気のある潮の匂い。
腐敗した海藻の異臭と、古い機械の電子基板が焦げたような化学的な悪臭が、見えない粘液となって喉の奥へ張り付いてくる。
開け放たれた洗面所のドアの向こうに見えるはずの廊下が、存在しない。
光を一切反射しない暗い水面が、ゆっくりと盛り上がり、また沈む。それは単なる水塊の動きではなく、巨大な意思を持って呼吸しているかのような悍ましさだった。
海水の嫌な苦味が唇にまで滲んできて、心臓が肋骨の内側で警鐘のように跳ね回った。
視界が白く濁る…気がつくと、足の裏にひどく冷たく、ぬかるんだ感触があった。
獣の咆哮のような嗚咽のような不快な音を立てるサイレンが鳴り響いた。
厚い霧に覆われ、時間帯すら分からない…真夏であるはずなのに、皮膚にまとわりつく風は凍えるほど冷たい。
それでいて湿度が異常に高く、かいた汗が一切蒸発せず、衣服が塩を含んで重くのしかかってくる…波に洗われて鈍い音を立てていた。
海は波打っているのに、生き物の気配が全くしない…魚の跳ねる音も、海鳥の声もない…完全な静寂の中で、水塊が動く物理的な音だけが響いている。

——遥。

霧の奥から、不意に名前を呼ばれた。
びくりと肩が揺れる。

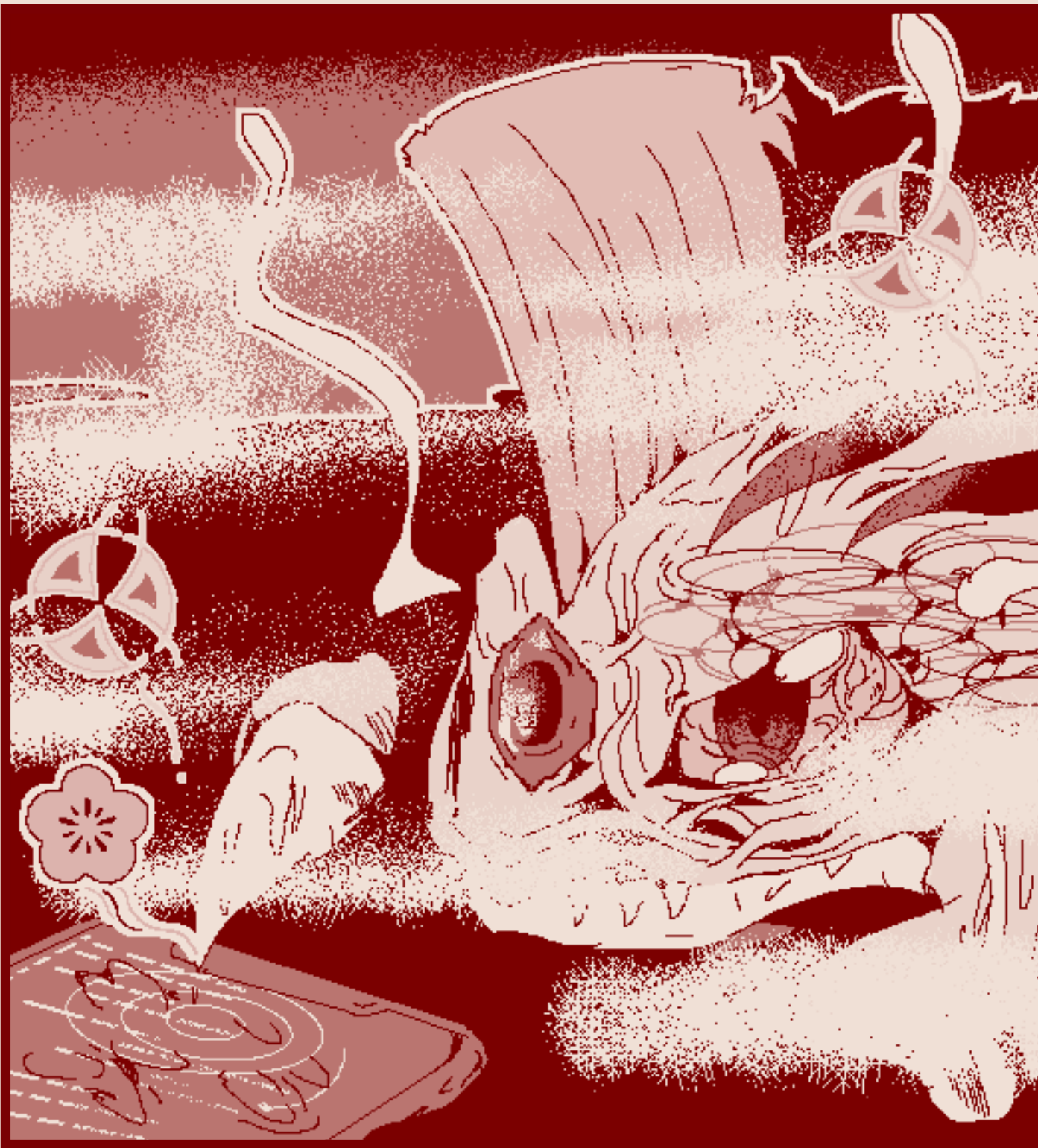
——遥。還っておいで。

それは、知った声だった。
言葉の端々に、気泡が弾けるような不吉な破裂音が混じっている。
背筋を強烈な悪寒が駆け抜ける。逃げなければならぬ。理性がそう警鐘を鳴らしているのに、足は一步も後ろへ退くことができない。

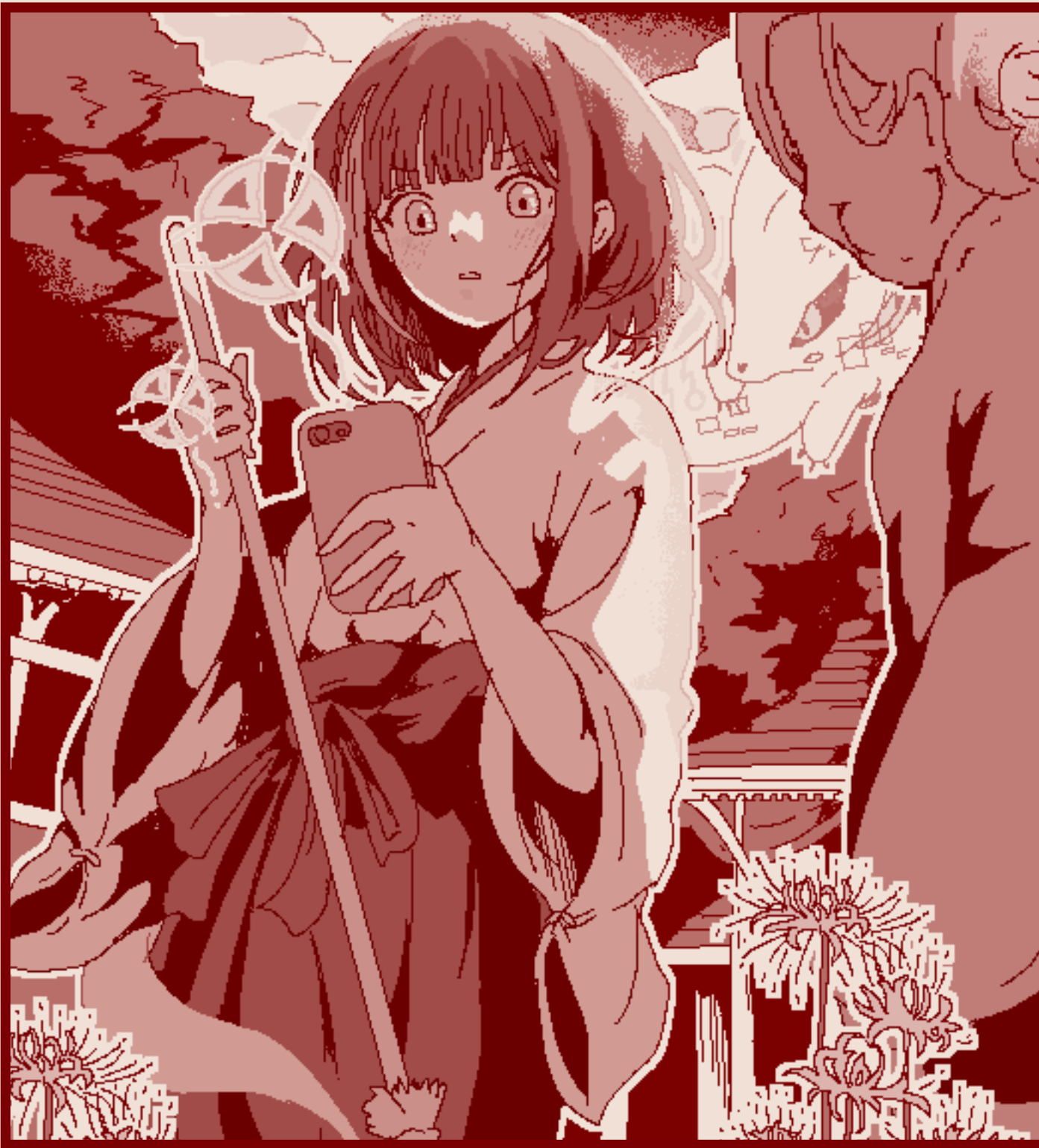
—お前も、一緒にここへ来るはずだったんだから。

——足りないの…お前がいないと、家族は揃わない。

遥の虚ろな瞳から、光が消える。
一步…足のつま先が、重い海水に沈む。
また一步…遥は一切の抵抗を持たないまま、迎えを待つように両手をだらりと下げ、底知れぬ海へと歩みを進めていった。



洗面所の鏡には、もう何も映っていなかった。
ほんの数秒前までそこにいたはずの少女の姿は、ひやりとした朝の空気と、鼻を突く古い機械の焦げたような匂いだけを残して消失していた。
残されたベタモンは、濡れた床にへたり込み、浅い呼吸を繰り返していた。
ベタモンの緑色の皮膚は、本来であれば適度な湿り気を好むはずだった。
しかし今、足元を浸しているのは王港町の清浄な水ではない。腐った海藻と、沈殿した鉄錆が混じったような、酷く重たい潮だった。
ベタモンは、デジモンと呼ばれるデジタル生命体の一種である。 彼らの身体は情報データで構成されており、現実の生物とは異なる痛覚を持っているはずだった。
だが、遥を霧の中へ引きずり込もうとした「何か」に触れた瞬間、ベタモンの背を強烈な痛みが貫いた。
物理的な裂傷ではない。データの一部が削り取られ、そこに黒い泥のようなノイズがねじ込まれたような、圧倒的な欠損の感覚だった。
「ハルカ……ッ！」
どこへ？ あの鉛色の、生き物の胃袋のようにうねる海へ。
助けなければならない……！ベタモンは痙攣する指先で、床に転がったスマートフォンに似た通信端末へアクセスを試みた。
デジモンはネットワーク空間の AI 生命体として、電子機器への直接的な干渉が可能である。
ベタモンは自身の残存データを振り絞り、考え得る限りの宛先へ救援信号をばら撒いた。王港町の隣町にある神社の留守番電話、参拝者用の御朱印管理アプリ、そして商店街の防犯カメラのサーバー群。
『…、…！』
言葉はパケット化され、ネットワークの海を疾走する。
だが、その信号にはベタモン自身の意図しないものが混入していた。
送信ログの片隅に、拭っても消えない黒い潮のような滲みがこびりついていたのだ。
ベタモンの悲痛な叫び声の裏で、ざぼり、ざぼり、と、重たい波の音が鳴っている。
それに混じって、ぶくぶくと泡が弾ける音、魚が跳ねるような生臭い水音、そして、古い読経のようにも聞こえる呪術的なノイズが、まるで寄生虫のように信号へ絡みついていた。
もしその音声データの波形を限界まで拡大して視覚化すれば、誰もが戦慄しただろう。
その波形は、魚の鱗のように規則正しく、びっしりと並んだ異様な模様を描いていたのである。



夏の日差しは、暴力的とさえ言えるほど明るかった。境内に敷き詰められた玉砂利が、容赦なく太陽光を照り返している。木立の中からは、耳鳴りと錯覚しそうなほどけたたましい蝉時雨が降り注いでいた。「あー、もう。あっついわあ…。」

小都華は竹箒を握ったまま、額に浮かんだ汗を手の甲で拭った。神社のアルバイトの制服である白衣と緋袴は、見た目には涼しげだが、肌に張り付く熱気までは遮ってくれない。「すみません、ちょっとええですか？」

苛立ちを含んだ声に振り返ると、スマートフォンを手にした中年女性の参拝者が立っていた。「これ、どうなってるんです？ 御朱印のアプリ、さっきから全然動かへんのやけど…。」

「え？」

小都華が覗き込むと、女性のスマートフォンの画面は異様なことになっていた。本来なら美しい和柄の背景が表示されるはずの画面に、まるで墨汁を零したような黒い染みが広がっている。染みは脈打つように蠢き、その中心には文字化けした「凶」という文字が、エラーコードのように大量に羅列されていた。「うわ、なんやこれ。悪趣味やな。」

小都華は関西弁で素直な感想を漏らした。単なるバグではない…スマートフォンの表面から、夏場放置された水槽のような、饅えた匂いが漂ってくるのを感じたからだ。(またかいな…。)

小都華が短く息を吐くと、彼女の足元の影がわずかに揺れた。影の中から、するりと白い管狐のような姿をしたデジモン…クダモンが姿を現した。一般の人間には、その姿をはっきりと認識することはできない。クダモンは何も言わず、ただ静かに首を振り、女性のスマートフォンへ向けて微弱な浄化のデータを送った。神社でいうお祓いに相当する、データ修復のプロセスである。

小都華は懐から小さな御札を取り出し、スマートフォンの裏側にそっと触れさせた。「すみませんねえ、ちょっと電波の調子が悪いみたいで、ほら、直りましたよ」

小都華が笑顔を取り繕って画面を見せると、黒い染みは嘘のように消え去り、元の美しい御朱印の画像が戻っていた。女性は狐につままれたような顔をしながらも、「ああ、おおきに」と去っていった。「まったく、最近こういうの多すぎひん？」

小都華がぼやくと、クダモンは細い目をさらに細め、どこか遠くを見るように境内の外へ視線を向けた。

デジモンという存在が、電子ネットワーク時代に再び輪郭を得た怪異や妖怪の類であるならば、この程度の「いたずら」は日常茶飯事だ。

だが、小都華の肌は、先ほどの黒い染みから発せられていた湿り気を、まだはっきりと覚えていた。

太陽はこんなにも明るいのに、背筋を撫でる風だけが、妙に冷たかった。



社務所の中は、業務用のエアコンが低く唸りを上げ、肌寒いくらいに冷やされていた。

しかし、室内を満たしている空気は決して快適とは言えなかった。肺に吸い込むたび、目に見えない細かい砂利が気管にへばりつくような、異様な息苦しさがある。

普段は温厚で笑顔を絶やさない神主が、今はパイプ椅子に深く腰掛け、デスクの上に置かれた自分のスマートフォンを血の気の引いた顔で見つめていた。

「小都ちゃん」

竹箒を片付けて戻ってきた小都華が呼ばれ、足を止める。

「ちょっと、これを聞いてくれないか」

神主は、まるで汚物か爆発物でも扱うかのような慎重な手つきで、スマートフォンを机の中央へ滑らせた。画面には、見慣れない音声データの再生バーが表示されている。

「なんですか、これ」

小都華が訝しげに再生ボタンへ指を伸ばした、その瞬間だった。

社務所の空気が、物理的な質量を持って歪んだ。

『……ハルカヲ……タス……ケテ……』

ノイズまじりの、ひどく掠れた悲鳴のような声。

だが、小都華の胃の腑を直接掴み上げたのは、その声の主の切迫感ではなく、背後に張り付いている「音」と「匂い」だった。

ざばり。ざばり。

重たく、粘り気のある水塊が岩肌に叩きつけられる音がする。ここは海から遠く離れた市内の神社である。それなのに、録音データが再生されている間だけ、社務所の密閉された空間に、むせ返るような濃密な潮の匂いが充満した。

太陽に焼かれて腐敗した海藻と、古い電子基板が黒焦げになったような、化学的で生臭い悪臭。

さらに、波音の隙間から、ぶくぶくと水面で泡が弾ける音に混じって、古い読経のような、あるいは呪詛のような低いノイズがうねっている。

小都華は反射的に両腕を強くさすった。冷房のせいではない。皮膚の表面に、見えない冷たく濡れた布を何重にも被せられたような、生理的な圧迫感があった。

「…これ、ただのイタズラとちゃいますん？」

小都華の低い声に、神主は重々しく頷いた。

「今朝、うちの留守番電話と、御朱印アプリの管理サーバーに同時に入っていたんだ。実は……ここ数日、市内の他の神社でも、似たような不審なノイズや水滴の怪異が報告されていてね」

神主は、引き出しから一束の封筒を取り出した。

「放っておけるものじゃないし。…伽夜子さんたちに、頼もうと思う。」

伽夜子。表向きは悪霊祓いを生業としているが、その実態はデジモンや電子ネットワークが絡む怪事件を専門に処理する請負人である。

小都華のアルバイト先であるこの神社の神主は、彼女の手腕を誰よりも信頼していた。だが同時に、「彼女を呼べば、確実に法外な依頼料をむしり取られる」という世俗的な畏れも抱いているらしかった。

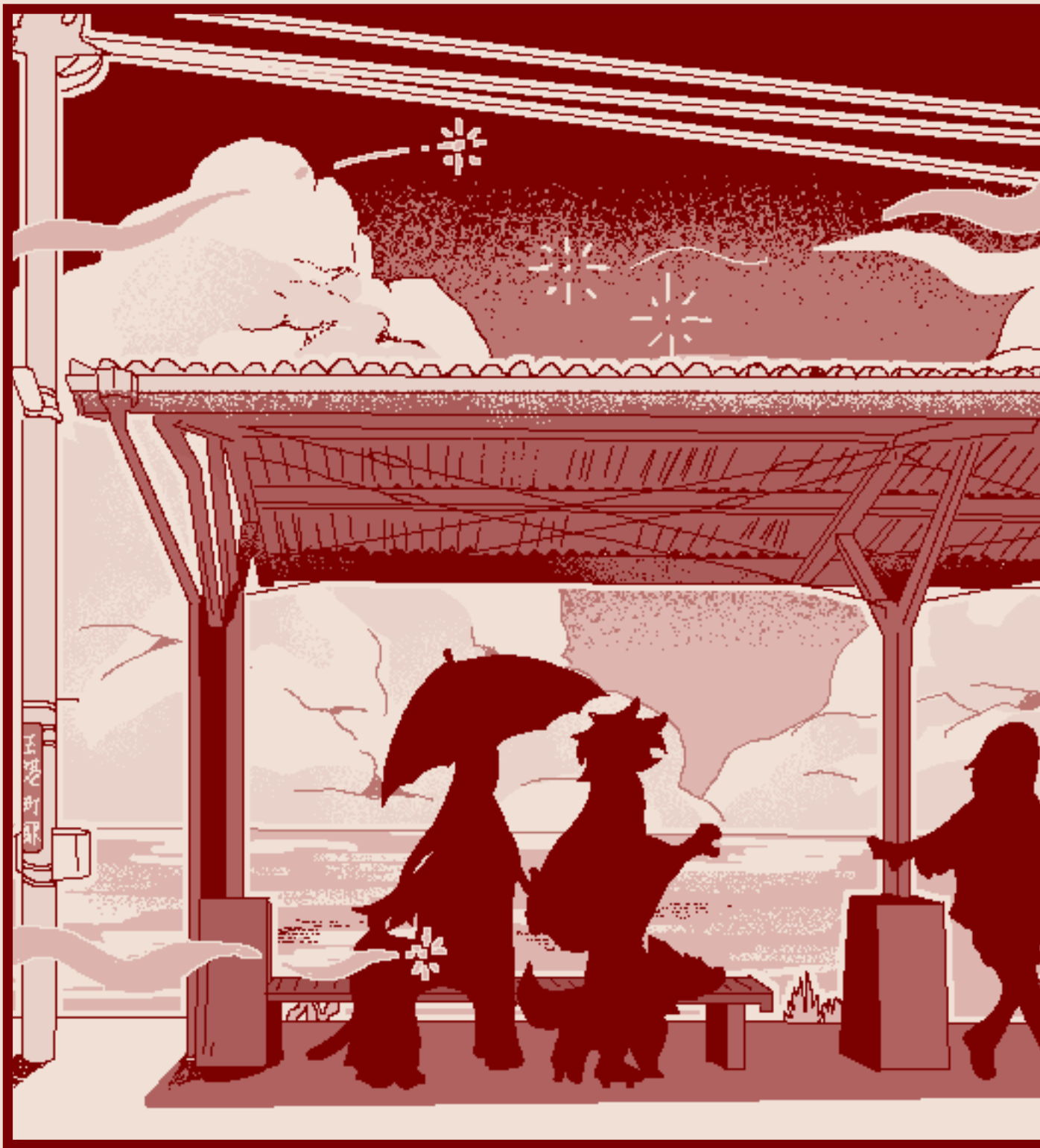
小都華は、内心で神主の財布に手を合わせつつ、もう一度、再生の止まったスマートフォンを見下ろした。

(……ハルカ?)

助けを求めるその声は、いつもの乾いた電子怪異のそれとは違う。じっとりと湿り、今にも暗い水底へ引きずり込まれそうな、生々しい恐怖の輪郭を持っていた。



夏の日差しが、アスファルトを白く焼き焦がしている。
少し年季の入ったアパートの一室、「忒い屋、伽夜ちゃん。」の事務所兼住宅の網戸越しには、耳鳴りのようにけたたましい蝉時雨が容赦なく降り注いでいた。
首を振る安物の扇風機が、規則的な機械音を立てながら生温い空気をかき回していた。
「…う～ん、これがその送られてきた音声データってわけだね」
デスクチェアに深く腰掛けた伽夜子は、長い足を組み、薄く青みがかった瞳でノートパソコンの画面を見下ろしていた。
小都華は、ガラスの表面にびっしりとついた結露を指の腹で拭いながら、スピーカーから流れる重い波音にじっと耐えていた。
「こ…これ…ただの環境音じゃないですね」
向かいに座る月彦が、ボソボソとした、わずかに吃音を交えた声で呟いた。
丸まった背中では強張り、ノートパソコンから出力される波形データを食い入るように見つめている。「どういうことや、月彦？」
「波の音に聞こえますけど、現実の音じゃない…海を模倣して生成した音です。…それに、この波形…」
月彦がキーボードを数回叩き、音声の波形データをモニターの限界まで拡大表示する。
画面に映し出されたのは、無機質なデジタルの直線ではなかった。曲線が交わり、まるで無数の魚の鱗がびっしりと重なり合っているようなパターンが浮かび上がった。
「うわ、キショ…ひどいデータ汚染やな」
「単なるバグじゃないね。…ひどく呪術的なプロトコルを感じるねえ」
伽夜子が低い声で同意し、指をパチンと鳴らした。
「厄介なのは発信元だね、IP アドレスも GPS も完全に欠落している…ただ、発信の痕跡だけは、京都府の北部…赤牟市…平成に合併した王港町という港町の方角を示しているね。」
「王港町…海辺の町、ですね。」
月彦はぼつりと呟き、手元に引き寄せていた分厚い資料から目を離し、もう一度モニター上のメタデータを凝視した。
「…？ここ、時間がおかしいですね。」
月彦の吃音が消え、声に探求者特有の冷徹な響きが宿る。
「この救援信号を発信した端末…おそらくデジヴァイスのログですが、タイムスタンプが現実の時刻とズレています。」
「遅延やバグじゃないのかい？」
月彦は、画面の片隅に別のウィンドウを開き、王港町周辺の今日の潮見表を表示させた。
「…恐らく…D-3 の時刻ログですが、潮見表の満潮時刻と完全に同期しているんです。
…場所の鍵じゃない。潮の鍵です。地図で探しても、たぶん開かない。」
地図には存在しない、潮の満ち引きという月の引力と同調して開く戸口。
理解の及ばない暗い海の底から、何かががじっとりとこちらの世界を覗き込んでいるような感覚に、部屋の沈黙が深くなる。
だが、その這い寄るような恐怖の空気を、物理的な熱量を持った声が強引に叩き割った。
「…要するにやな！」
小都華が、両手でドンッとちゃぶ台を叩き、立ち上がった。
「そのハルカって子が、わけのわからん気味の悪い海のお化けみたいな連中に攫われかけて、相棒のデジモンが泣きながら助けを呼んでる…そういうことやろ！」
彼女のハキハキとした関西弁には、月彦が感じたような畏怖も、伽夜子のような知的な分析も含まれていない。あるのは、極めて真っ当で、飾らない純粋な生者の「怒り」だけだった。
「そんなん、放っておけへんやろ！ ほな、行くしかないやんか！」
小都華の健康的な生きた熱気が、部屋に激んでいたじめじめとした死の湿気を一瞬にして吹き飛ばす。
その言葉に、月彦の強張っていた肩の力がわずかに抜け、伽夜子は口角を上げて艶やかに微笑んだ。
「ふふ、お姉さん小都ちゃんのそういうとこだ～いすきチュッチュ。」
「うわ！ きつしよ！ やめてえな！ もう!!」
「ふふっ…しかし、神主も覚悟の上でこっちに依頼したんだ。
ま～た、たっぷりふんだくらせてもらわないとねえ。げへへ。」
金に目の眩んだ厭らしい表情をする伽夜子を見つつ（おっちゃん、ほんまご愁傷様やで…）と内心で手を合わせつつ、小都華は力強く頷いた。



王港町の駅に降り立った瞬間、暴力的なまでの夏の輪郭が一行を包み込んだ。空は突き抜けるような青色を誇り、巨大な入道雲が水平線の向こうで沸騰するように湧き上がっている。駅前のロータリーを抜けると、すぐそこに海があった。だが、それは録音データから滲み出していたような、生き物の胃袋のようにうねる鉛色の海ではない。

白く輝く堤防。打ち寄せる波はリズムカルに砕け、無数の光の粒となって飛沫を上げている。カモメの甲高い鳴き声が上空を横切り、海沿いの商店街からは、氷を砕く音や魚屋の威勢のいい声が潮風に乗って届いた。店先に並べられたラムネ瓶のビー玉が、強い日差しを乱反射してきらきらと輝いている。

ここは、生命力に溢れた「生きている海」の町だった。海は時に命を奪う残酷さを持つが、それでも人々は海の恩恵を受け、暮らしの音を立てて生きている。「うわーっ、めっちゃええ天気！ 海の匂いするわ！」

小都華は大きく背伸びをし、肺いっぱい潮風を吸い込んだ。彼女の健康的な足取りは、これから怪異に立ち向かおうというのに悲壮感を感じさせない。影の端には、クダモンの細長い白い姿が寄り添っている。「ふふっ、本当にいい景色じゃないか。日焼けには気をつけたいところだけどねえ」

伽夜子は白い日傘を優雅に回し、涼しげな横顔を海風に向けた。「あ、あの…小都ちゃんさん、あまり先に行かないでください」

月彦は目を細め、猫背をさらに丸めながら小都華の後を追った。明るく、健全で、正しい夏の港町。

しかし、月彦はその眩しさの中に立ちながら、海に面して建ち並ぶ「舟屋」の構造に目を奪われていた。

一階部分が海へ向かってぽっかりと口を開け、舟を引き入れるようになっている独特の家並み。光が強ければ強いほど、その一階の空洞部分には、墨を流し込んだような漆黒の影が澱んでいる。

生きている海のすぐ裏側に、死んだ海がぴたりと張り付いているような、微かな不一致。月彦の背筋を、見えない冷たい指がそっと撫で上げた。



白光に支配されていた海岸通りから、一本内陸の路地へ足を踏み入れた瞬間だった。

王港町の空気は微かに、しかし決定的にその性質を変えた

先ほどまで網膜を焼いていた太陽の熱線は、軒を連ねる古い木造家屋に遮られ、細い路地に黒々と澱んだ影を落としている。

潮風に乗って届いていたカモメの鳴き声や、ラムネ瓶が触れ合う涼しげな音は不自然に遠のき、代わりに木立の隙間から降り注ぐ蟬時雨が、耳鳴りのように鼓膜を塞ぎ始めた。

肌にまとわりつく風からは、生きている海が持つ健全な磯の香りが消え失せている。

古い畳が湿気を吸って重く呼吸しているような澱んだ空気と、日陰特有の埃っぽさが、肺の奥にじっとりと張り付いてきた…先を歩いていた月彦が、ふと足を止めた。「……月彦君？」

伽夜子の声に、月彦は無言のまま路地の錆びたトタン屋根の古書店へ視線を向けていた。

店先のワゴンには、潮風に晒されてカバーが波打った郷土資料が無造作に積まれている。

月彦は、まるで見えない糸に手首を引かれるような緩慢な動作でワゴンへ近づき、一番下に平積みされていた一冊の分厚い写真集を引き抜いた。

「えっと…『昭和の残光』…撮影者は、藤宮伊衛門…。」

ボソボソと、微かな吃音を交えながら呟き、重い表紙を開く。

湿気を吸い込んだ厚手の紙が、特有のカビの匂いを放った。だが、月彦の鼻腔の奥を撫でたのは、冷たく生臭い匂いがインクの裏側から立ち昇ってきたのだ。

小都華も横から首を突っ込み、そのページを覗き込む。

しかし、海へ向かってぼっかりと口を開けた一階の空洞の奥が、どれも異様だった。

日常の漁具や生活の小舟が置かれているべき場所に、出処の知れない装飾や祭具がひとつの塊のように絡み合っ

て吊るされている「…亀甲に似た敷石。蓬莱山に似た灯台。玉手箱めいた写真箱…それに、葦船に似た黒い小舟」

月彦は、ページ上の被写体を指先で一つ一つなぞりながら、ひどく慎重に言葉を選ぶ。

「魚尾のある聖母像…十字の影を持つ観音…。」

「なんや、ごっちゃごちゃしてんなあ。それに生活の写真ちゅうかカルトちっくやな」ページをめくると、さらに異様な一枚の写真が現れた。

遠目には、雨の中を海へ向かって進む「花嫁行列」のように見える。

だが、小都華の胃の腑が、内側から冷たい手で掴まれたように収縮した。

「…なんで誰も、この子の顔見てへんの？」

写真の中央を歩く少女は、華やかな花嫁衣装ではなく、身体の線を完全に隠し去るような重い白布を被せられている。そしてその上から、異様に太く、黒々とした腹帯が幾重にも巻き付けられていた。

少女は全く笑っていない。というより、瞳の焦点が虚空へ抜け落ちていた。

更に幾枚の写真には花婿の姿は、列のどこにもない。

「あると言えば、あるけど昭和の時代でここまで儀式的にしっかりやるのも珍しいね。」

伽夜子が冷ややかな声で言った。だが、その声音には強い警戒が滲んでいる。

「…キャプションには、『蔭洲升』とあります。でも、聞いたら店主さんは、そんな地名は知らないと…。」

月彦が、冷たい汗の滲む手で写真集をボタンと閉じた。

写真に写っていた黒い小舟と、重い腹帯を巻かれた少女の姿が、次の潮を待つ暗い空洞のように、網膜にべったりと張り付いて離れない。

「急ぎましょう。遙さんの家へ」

月彦の低い声に促され、三人は逃げるようにその路地を後にした。



遙の家は、路地の突き当たりにある古い平屋だった。
小都華が門扉を開け、玄関の引き戸に手をかけた。鍵はかかっていたなかった。
「すんませーん！ 渚さん、いてはりますかー？」
小都華が努めて明るい声を張り上げ、引き戸を横に開け放つ。
その瞬間、外で彼らを焦がしていた凶暴なまでの熱気が、見えない分厚い壁にぶつかったかのように完全に遮断された。
家の中は、真昼間だというのに照明が点いておらず、異様なほどに暗い。
そして、異常なまでに冷たかった。
冷房が効いているわけではない。光の届かない地下室や、水気の多い鍾乳洞の奥底に足を踏み入れた時に感じる、骨の髄まで染み込むような底冷えだった。
鼻腔を突いたのは、古い畳の匂いと、微かな線香の香り…それに混じって、あの神社の録音データで嗅いだ、腐った海藻と鉄錆のような死んだ潮の匂いがあった。
小都華が両腕をさすって身震いした時、奥の暗がりから、ずるり、と重い足音がした。
「…うわ、なんかここ、寒っ」「ちょっと小都ちゃんさん…!」「ふふ…。」
廊下の奥、奥の陰からゆっくりと姿を現したのは、小柄な老婆だった。
だが、月彦と伽夜子は思わず息を呑み、身体を硬直させた。
暗がりから浮かび上がった老婆の顔が、一瞬、長時間水に浸かって白く膨張した水死体のように見えたのだ。
水分を過剰に吸ってぶよぶよと重くなった皮膚が垂れ下がり、虚ろに濁った巨大な眼球が、瞬きもせずにくらぐらとこちらを見つめている。
月彦がポケットのデジヴァイスに指をかけ、筋肉を強張らせたその直後。
「あ、あの…どなたさんやらか？」
老婆が小都華の姿を視界に捉えた瞬間、その顔は、孫の帰りを心配し、長年の疲労に苛まれたごく普通の、しわがれた祖母の顔へと元に戻っていた…錯覚だったのか。
いや、違う。月彦の背中には、氷のような冷や汗がびっしりと張り付いている。
この家はすでに、外の明るい海とは違う、底知れぬ異界…海に半分ほど浸かっているのを感じ取った。

「遥なら、蔭洲升におるはずやわ」
麦茶が出された薄暗い居間で、祖母はぼつりと言った。
その声には、深い悲しみと、抗いようのない泥のような諦めが混じっている。
「おばあちゃん、それってどこにある町なん？」
「王港のはずれにある、あのトンネルを抜けたとこや。あの子な…ずうっとふさぎこんどってな…。せやから、蔭洲升に呼ばれたんや。
あっことは、そういうもんが帰る場所やさかい。帰ったもんは、また来るんや…ややこを抱えて。産んでもろて、ほんで今度は、あの子とそのややこを抱く番になるんや。」
祖母の口ぶりは、まるでそれが世界の絶対的な理であり、祝福すべき摂理であるかのように自然だった。
だが、語られている内容は完全に狂っている。一人の少女が、何かの子を孕むための器として連れ去られたことを、肉親が肯定しているのだ。
伽夜子が、扇子を畳んで静かに口を開いた。
「一つ聞きたいのだけど…その『蔭洲升』という地名。貴女は、誰から聞いたのだい？」
「え…？」
祖母の顔から、ずっと表情が抜け落ちた。
「誰からって…そら、昔から…」
祖母の目が、水面を漂う木の葉のように激しく泳ぎ始める。皺だらけの手が、自分の膝の上で所在なさげに小刻みに震えた。
「昔から、知ってる…いや、誰に教わったんやろか。地図には…地図にはないのに。うち、なんであの子が蔭洲升におるって、知ってるんや…？」
祖母は本気で孫を心配している。決して嘘をついているわけではない…だが、彼女の記憶の根底に、いつの間にか黒いインクがポタリと垂らされ、論理が完全に破綻しているのに、事実だけがそこに癒着している。人間の認識や記憶という強固なはずの境界線がドロドロと溶かされている。
月彦は、居間の仏壇の横に飾られた写真立てに目を向けた。遙と、その両親が海辺で笑っている古い写真。
だが、写真立てのガラスの内側だけが、びっしりと結露して湿っていた。そして、写真の中で笑う遙の足元だけが、黒い染みのようにねっとり濡れて歪んでいる。
「…行きましょう」
月彦は立ち上がり、静かに、しかし断固とした声で言った。
「あ、あの…おばあさん。遙さんは、僕たちが必ず連れて帰りますから」
月彦の言葉に、祖母は答えなかった。ただ虚ろな目で、乾いた手の中の何も入っていない湯呑みを見つめ続けていた。



王港町の外れ。海鳴りが遠のき、山肌が迫る旧道に、その錆びついたバス停は立っていた。赤茶けた鉄柱に支えられた丸い標識には、塩風に晒されて半分剥がれかけた手書きの文字で薩洲升町 行と記されている。

暴力的な真夏の日差しがアスファルトをじりじりと焦がしているというのに、バス停の周囲に落ちる影だけが、不自然なほどに色濃く、そしてじっとりと濡れていた。

遠くから、古いディーゼルエンジンが重苦しく喘ぐような音が聞こえてくる。

やがて陽炎の向こうから姿を現したのは、車体のあちこちがひどく錆びつき、緑色の苔のようなものがこびりついた旧式のボンネットバスだった。

ブシュー、と濁った排気音を立てて、折れ戸が開く。

「…。」

乗り込もうとした小都華の足が、一段目のステップでピタリと止まった。

「なんやこのバス…床、べちゃべちゃやんか」

小都華の呟きに、後ろに続く月彦も息を呑んだ。クーラーなど効いていないはずの車内から、まるで冷蔵庫の底に溜まった冷気のような風が這い出してきたのだ。床板は、誰かがバケツで大量の海水をぶち撒けたようにどす黒く濡れそぼっている。

そして、鼻腔を強烈に突くのは、炎天下で内臓を抜かれた魚が腐敗していくような生臭さと、古い鉄錆の匂い。

「…す、すみません。大人三人、お願いします」

月彦は微かに声を震わせながら、運賃箱に小銭を落とそうとした。

だが、運転席に座る男は無言だった。深く被った制帽の鍔で顔は全く見えず、ただ前方の窓ガラスだけを向いている。

しかし、帽子の下から覗く首筋の皮膚には、人間のそれとは異なる青白くぬめりとした光沢が、ゼリーのように張り付いていた。

…のように一瞬月彦には、見えた。

伽夜子が扇子で口元を覆い、月彦の耳元へ顔を寄せる。

「…まるで、霊柩車に乗っている気分だねえ」

いつもの飄々とした演技染みた声であるが、冷ややかな、しかし明確な警戒を含んだ声。

バスには、彼ら以外の乗客は一人もいなかった。

ガタガタと車体をひどく軋ませながら、バスは山間の道へと進んでいく。

窓の外の景色から、青い海が完全に隠れた。迫り来る山肌の緑はどこか黒ずんでおり、生気が感じられない。

耳鳴りのように響いていた蝉時雨が、一つ、また一つと、まるで電源を切られるように途切れていく。

代わりに、車体の床下から、あるいは窓ガラスの隙間から、ざばり…ざばり…と、重く粘り気のある波音が響き始めた…山の中を走っているはずなのに…前方に、鬱蒼とした木立に飲み込まれかけた、赤レンガ造りの古いトンネルがぼっかりと口を開けているのが見えた。

「トンネル…。」

月彦が呟く。

バスがその暗黒の口へ近づくにつれ、窓の外を照らしていた夏の白い光が、急速に色褪せ、濁った雨水のような灰色へと変質していく。

日常の論理が、物理法則が、音を立てて溶け落ちる。

理不尽で湿った異界への入り口が、彼らを乗せたバスを丸ごと、その暗い胃袋の中へと飲み込んだ。



バスが赤レンガのトンネルへ滑り込んだ瞬間、世界から夏が切断された。
天井に等間隔で並ぶオレンジ色のナトリウムランプはひどく頼りなく、車内を照らすというよりは、座席の影を不気味に長く引き伸ばす役割しか果たしていない。
「なんやここ…クーラーも点いてへんのに、急に冷えてきたな。」

小都華が両腕をさすりながら、窓ガラスに額を近づける。ガラスの表面には、すでにびっしりと結露が浮かんでいた。外の光が水滴に乱反射し、視界を不気味に歪ませる。

呼吸をするたびに、生温かく、ひどく塩辛い空気が肺の奥まで侵入してくる。気管の粘膜に、見えない泥がこびりつくような息苦しさ。

ふいに、頭上の車内灯が不規則な瞬きを始めた。

「ジジッ、ジッ。」

ただの接触不良ではない。光が途切れるコンマ数秒の暗闇の中、視界の端に、四角いブロック状のデジタルノイズがモザイクのように走ったのを、月彦は見逃さなかった。

「伽夜子さん。」

「ああ。探す手間が省けたね…境界が、溶け始めている。」

伽夜子が日傘の柄を両手で握り締め、楽しげな声色の裏に冷たい殺気を忍ばせる。

次の瞬間、車内の照明が完全に落ち、トンネルのナトリウムランプさえもふっと消滅した。

完全な暗闇…同時に、むせ返るような濃い霧が、閉め切られているはずの車内にどこからともなく湧き出してきた。

ただの水蒸気ではない。それは圧縮された古いデータのように重く、皮膚の表面にねっとりまとわりつき、視界だけでなく聴覚すらも奪い去っていく。

「ちょっ、なんやこれ！ 前見えへん！」

小都華の焦ったような声が、まるで水底から発せられたようにくぐもって聞こえた。

「小都ちゃんさん！動かないで…！」

月彦が座席から立ち上がり、彼女のいた後方座席へ手を伸ばす。

だが、月彦の指先が掴んだのは、濡れて冷たくなったシートだけだった。

「小都ちゃんさん!?」

返事はない。足元にいたはずのクダモンの気配も、完全に途絶えている。

つい数秒前までそこにいたはずの少女の存在情報が、跡形もなく消え失せていた。

神隠し。あるいは、プロトコルを無視した強制的な隔離。

月彦の背筋を、強烈な悪寒が駆け下りる。

「う、運転手さん！ 止めてください！ 人が、人が消え…！」

月彦は運転席へと身を乗り出し、声を張り上げたが、ブレーキは踏まれない。バスは暗闇の霧の中を、一定の速度で走り続けている。

「運転手さん！」

月彦の叫びに、運転手はゆっくりと、本当にゆっくりと首だけを後ろへ向けた。

遠くから獣の咆哮のような鳴咽のような不快な音を立てるサイレンが鳴り響いた。

制帽の下から現れたその顔に、月彦は息を呑み、全身の筋肉を硬直させた。

それは、人間の顔ではなかった。

両目の間隔が異様に離れ、まぶたという器官が存在しない。ぬらぬらと光る巨大な眼球が、一度も瞬きをすることなく月彦を見据えていた。首からエラにかけての皮膚は青白く変色し、ゼリー状の粘液に覆われ、そして霧の様に揺らめいている。

「そっちは…駄目だ…穢れが混じってる…乙女にはなれん。」

（ハンギョモン…？いや…似ているけど…違う!!）

運転手の喉の奥から、空気が漏れるような、あるいは泥水が沸騰するような音が鳴った。それはハンギョモンによく似た、しかし純粋なデジモンとも異なる、ひどく歪で悍ましい「何か」だった。

「おや、それは私の事かい？ユニコーンが一瞬で跪く程の乙女に言ってくれるじゃあないか。」



（伽夜子さんの身体が半分デジモンで構成されてるのを見抜いたのか…？）
（これは確信…欲しがってるのは…常世の女、子供を宿せる女なんだろ…！小都ちゃんまで欲張るとはねえ！）
「コヅキガルルモン!!」

月彦と伽夜子の思考がリンクし、月彦の叫びと同時に、彼の足元の影から銀色の獣が跳躍した。コヅキガルルモンが空中で身体を捻り、首に巻かれた赤い注連縄を光らせる。

だが、敵の動きも異常だった。ハンギョモンに似た「何か」は、その場から腕だけを異様な長さまでゴムのように引き伸ばし、月彦の顔面へ向けて巨大な水掻きのある手を突き出してきた。

「月彦君！」

伽夜子の声。同時に、一枚の白い御札が闇を切り裂いて飛び、伸びてきた腕の関節にピタリと張り付いた。

炸裂音と青白い火花が散り、敵の腕が強引に弾き返す。

「ブシアグモン殿！手加減は無用だよ！」

「応ッ!!ワシの超高速一文字斬り、とくと見い!ワンコ!合わせい!」

コヅキガルルモンがハンギョモンに人魂状の炎を当てようとするが弾かれる。しかし、人魂状の炎は消えずバス内に満ちた水に落下しそこから高温の水蒸気を発生させ、その熱に何かは一歩後ずさり更に視界を塞いだ。

飛び出したブシアグモンが、得物を構え、弾かれた敵の腕を足場にして肉薄する。空気が鋭く鳴り、一陣の風が車内の霧を切り裂いた。

ブシアグモンの一撃が、ハンギョモンに似た怪物の胴体を斜めに両断する。

遅れて、再びコヅキガルルモンが口から青い人魂状の炎を吐き出し、敵の顔面を正確に撃ち抜いた。

勝負は一瞬だった。

月彦もすでに、ポケットから赤いデジヴァイス iC を引き抜き、もう片方の手には呪符をびっしりと巻き付けた鉈を握りしめていた。

だが、彼が踏み込む前に、敵は形を崩し始めていた。

しかし、爽快な勝利の感覚は微塵もない。

胴体を両断され、炎に焼かれた敵からは、血の一滴も流れ出なかった。デジモンが倒された時に飛散するはずの、光のデータ粒子すら現れない。

運転手の身体は、まるで腐った泥が溶けるように、ぶくぶくと醜い泡を立てて足元へ崩れ落ちていったのだ。

「…おいおい、月彦ちゃん。なんだい『コレ』は目測ではハンギョモン…完全体だろ？弱い…という手応えが全くねえぜ？」

「うへん…隙を作って外に出て完全体になってから本番と思っていたが…。」

「…。」

ブシアグモンが刀を振り下ろした姿勢のまま、怪訝そうに鼻を鳴らす。

崩れゆく泡の塊の中から、残骸となった大きな眼球だけが、ギョロリと月彦達を見上げた。『お前達は呼ばれていない…陀金（だごん）の海は…。』

それは、空気の振動ではなく、直接脳髄に響くような声だった。

『…呼ばれた者…選ばれた乙女しか…常世からは渡れない…。』

テレビの電源が切られたような音と共に、泡の残骸は完全に蒸発し、後には息が詰まるほどの生臭さだけが残された。

主を失ったバスは、しかし依然として一定の速度で霧の中を進んでいる。

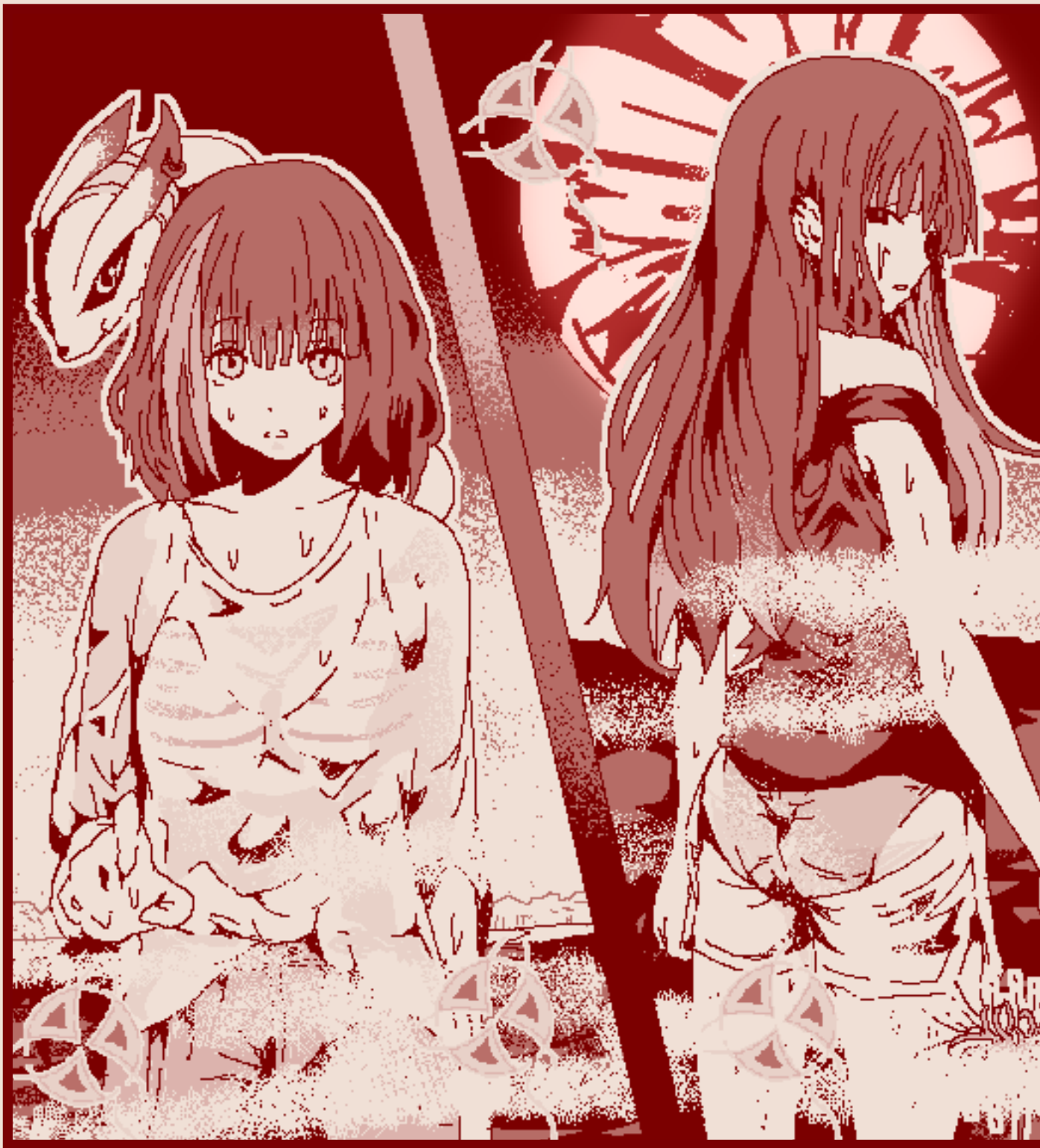
「小都華さん…。」

月彦は鉈を下ろし、誰もいない後部座席を見つめた。

呼ばれた者しか、渡れない。

その言葉の意味するものが事実であるならば、小都華は今、あの腐臭のする声の主達が待つ蔭洲升の底へ、たった一人で引きずり込まれてしまったということになる。

月彦の奥歯が、強く噛み合わされた。



全身を重い鉛の布で包まれたような感覚だった。
小都華は、顔に当たる冷たく湿った風の感触で意識を取り戻した。
「…う…んん…」

ゆっくりと目を開ける。
視界のピントが合うにつれ、彼女は自分が仰向けに倒れていることに気がついた。
身を起こそうとしたが、身体が異常に重い。真夏だというのに、吹き付ける風は骨を凍らせるほど冷たい。それでいて、湿度がまとわりつくように高く、服が、まるで大量の塩水を吸い込んだように重く冷たく肌に張り付いていた。
「なんや…、ここ…、月彦…？伽夜子さん？」

「コトカ、無事？」
すぐ脇から聞こえた冷静声に、小都華は弾かれたように顔を向けた。
黒ずんだ砂の上で、白い管狐のような姿をした相棒のクダモンが、体を震わせてまとわりついた砂を振り落としていた。

「クダモン！ よかった、はぐれへんかったんやな」
小都華はほっと息を吐き、クダモンを抱き寄せようとしたが、その白い毛並みはひどく冷たく、じっとりと湿っていた。
「うわ…キショい」「おい！というか小都華も同じだし！」「うげ！ほんまや！びっちゃしとる、きっしょ。」

立ち上がり、周囲を見渡す。
足元にあるのは、白い砂浜ではなかった。黒ずんだ砂に混じって、錆びたUSB端子、ひび割れた緑色の電子基板、そして千切れて腐敗したケーブルの束が無数に打ち上げられ、まるで機械の墓場のような海岸線が続いていた。
空は厚い鉛色の雲に覆われ、太陽の光は一切届いていない。
目の前には、暗く濁った海と赤く輝く月のみが広がっている。
波は一定のリズムで打ち寄せているが、それを生きている海とは小都華には思えなかった。

鳥の声も、虫の羽音も、魚が跳ねる水音もしない、静寂と死の匂いが支配していた。
「月彦…伽夜子さん…？」
呼んでも、返事はない。

「通信も繋がらない…。ここは現実世界は勿論ないけど…アタシ達の知るデジタルワールドとも違う…気がする…」

クダモンが細い目をさらに細め、濁った海を警戒するように見つめた。
小都華は自分の腕を抱きしめ、肌に粟立つ寒気を必死に抑え込んだ。
普段なら「冗談きついわ！」と軽口を叩くが、この空間は、彼女の持つ常識の範疇という壁をじわじわと、しかし確実に溶かしてくるような気味の悪さがあった。

「あかん、ビビってたアホらしいわ！なんやねんこの海、めっちゃ陰気臭い」
彼女はパンッ！と両頬を両手で強く叩き、強引に気合を入れた。手のひらの痛みが、自分が生きているという輪郭を辛うじて保たせていた。

全身を重い鉛の布でくるまれたような、逃げ場のない圧迫感だった。
見渡すと波打ち際を舐める鈍色の水面を見つめ、海に足を漬け風が吹けば吹き飛びそうな儚げな人影があった。

小都華が駆け寄ると、少女は、首の折れた人形のようにゆっくりと小都華の方へ顔を向けた。
「あんた…が、渚 遥さん？」
「…あんたは…誰？」

蔭洲升の海で小都華は探している少女を廻り出会った。



急ブレーキをかけることもできず、月彦達は惰性で走り続けるバスに乗ったまま、やがて霧の晴れ間へと抜け出した。

トンネルの出口を越えると、窓の外には再び暴力的なまでの真夏の日差しが飛び込んできた。

「ここは…。」

月彦がバスのドアを手動でこじ開け、外へ飛び出す。

そこは、見覚えのある場所だった。白く輝く堤防。遠くに聞こえるカモメの声。けたたましい蝉時雨。

王港町だ。

蔭洲升町へ向かうはずのトンネルを抜けたのに、彼らはなぜか、入り口であるはずの王港町側へ吐き出されていたのだ。物理法則も空間の連続性も完全に無視された、あちら側からの明らかな「乗車拒否」。

「ふふ…どうやら、向こう様からは招かれざる客扱いされたみたいだね。」

伽夜子が日傘を開きながら、優雅に、しかし目の奥に怒りを湛えてバスから降りてくる。

「笑い事じゃありませんよ…!小都華さんが…!」

「落ち着き給え、今は冷静に動かないと助けられるものも助けられないよ。」

「…っ。…すみません。そうですね。」

月彦が声を荒らげようとしたその時、コヅキガルルモンが低く唸り声を上げ、堤防の陰へ向けて駆け出した。

「?どうしたの、コヅキガルルモン?」

月彦が後を追うと、コンクリートの強烈な照り返しを避けるような影の中に、緑色の小さなデジモンが倒れていた。

「ベタモン…!?」

月彦が駆け寄り…しかし、その状態はひどいものだった。

緑色の皮膚は所々が黒く変色し、データが欠損したようにノイズが走っている。浅く速い呼吸を繰り返す、背鰭は無惨に折れ曲がっていた。

物理的な裂傷というよりは、データそのものを不純な泥で抉り取られたような、痛々しい傷跡だ。

「しっかりしてください…!」

月彦がデジヴァイス iC をかざして微弱な修復データを送る。

伽夜子も傍らにしゃがみ込み、白い御札をベタモンの背中にそっと貼った。

徐々に呼吸が落ち着き、ベタモンが重い瞼を開ける。

「…誰だ、あんたら…?」

警戒と痛みが混じった、掠れた声だった。

「怪しい者じゃありません。…留守番電話のハルカを助けてというメッセージを聞いて来た…テイマーです。」

月彦が答えると、ベタモンの緑色の腫が、すがるように大きく見開かれた。

「電話…!あんたら、助けに来てくれたのか…、ッ!」

ベタモンは身を起こそうとして崩れ落ち、目からデータ化された涙を溢れ落とした。

「頼む…!遥が、霧の海に消えちゃった!」

ベタモンは地面のコンクリートを鋭い爪で引っ掻いた。

「俺じゃ…引き留められなかった。あいつ、誰かの声みたいなのに呼ばれて…自分から、暗い海の方へ歩いていっちゃって…俺が止めようとしたら、変な化物どもに…ッ!」

「君も落ち着きたまえ、傷に響くよ。声…なるほどね。」

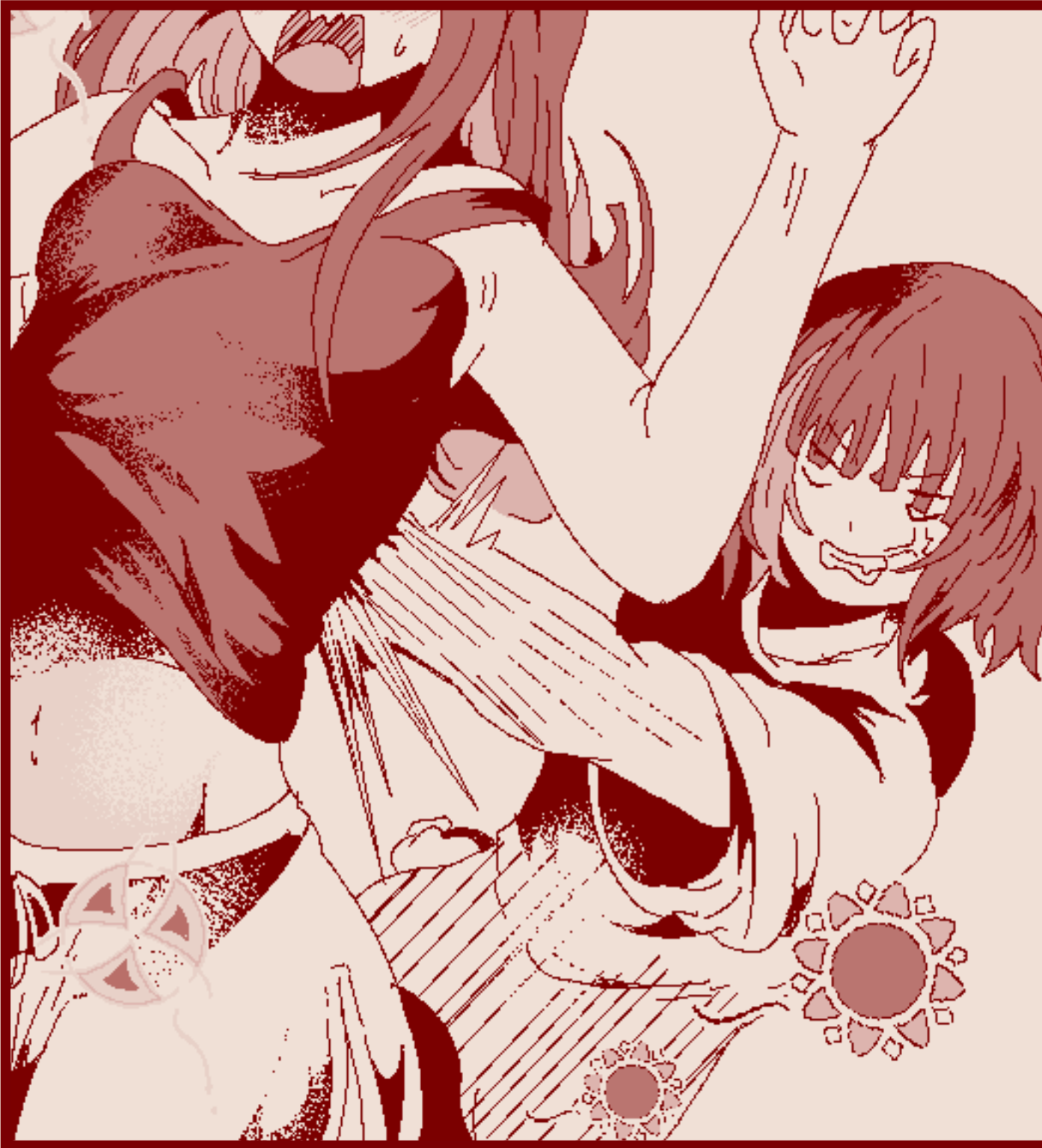
伽夜子が扇子で口元を覆い、静かに目を伏せ思案を巡らせ思い出していた。

月彦は、ベタモンを抱き寄せた。

遥の救出という本来の目的に加え、小都華まで巻き込まれる形で、あの霧の向こう側へ隔離されてしまった。

月彦の視線が、ベタモンの残る黒い欠損へと注がれる。あの傷口からは、まだ微かに、トンネルの中で嗅いだのと同じ腐った潮の匂いが漏れ出していた。

(この傷跡のデータ汚染…。)



「もし!も〜し!ぼ〜とっしとるとこ悪いけどウチの事分かるか!?自分の事分かるか!!!」

小都華は呆けている遥の肩を容赦なく揺らす。

「…あんた、めっちゃ揺すってくるやん。」

少女…遥は、おっとりとした京都弁で、ひどく冷静に呆けたように言い放った。
「初対面でそないアグレッシブに来られると、ウチ、ちょっと引くねんけど」

今にも泣き出しそうな遭難者かと思いきや、返ってきたのは妙に棘のある言葉だった。小都華は思わず面食らいながらも、怒気を孕んだ声を上げる。

「こんな気味悪いとこでなにボーっと何してんねん!死ぬ気か!？」

遥は再び、暗い水面へと視線を戻した。その横顔には、同年代の少女には不釣り合いなほどの、濃く湿った喪失の影がへばりついている。小都華から、緑色のデジモンが必死に助けを呼んでいたことを聞かされても、遥の表情は動かなかった。

「…そっか。アホやな、あの子。ウチなんか、放っとけばええのに」

泥のように重い諦めが、その言葉からこぼれ落ちる。

その瞬間、小都華の平手が遥の背中を強烈に叩き据えた。

「キャッ!?痛っ…!?何すんの!？」

「放っとけばええとか、悲劇のヒロインぶってんちゃうぞ!相棒も泣きながら助け呼んでんのに、ばっちゃんもごつつ心配しとったんやで!? こんなとこで黄昏れてる場合か!!!ボケ!アホ!カス!!ほら、歩く!!!!」

小都華は遥の細い腕を掴み、乱暴に引きずり起こした。同情も慰めもない、物理的な質量を伴った怒号。

その飾らない暴力性が、遥の心を絡め取っていた見えない海藻の蔦を強引に引きちぎった。

遥は渋面を作りながらも、小都華のガサツさに呆れたように小さく息を吐き、口元に微かな笑みを浮かべた。



小都華と遥、そしてクダモンの二人と一匹は、灰色の霧に半ば沈んだ海岸沿いの町へと足を踏み入れた。

小都華は、足の裏を怪我しかねない未舗装の道を歩く遥を見かねて、強引に自分の履いていたサンダルを押し付けた。「ウチは足の裏なんてガチガチやから大丈夫や!」と無理に笑い飛ばす言葉の裏で、小都華の胃の腑はすでに異様な空気感に締め付けられていた。

木造家屋が連なる路地には、腹を縦に割られた魚の残骸が無造作に打ち捨てられている。ひどく生臭いにもかかわらず、蠅一匹たかっておらず、野良猫の姿も海鳥の声もない。腐敗という生命の循環すら停止した、真空の標本箱の中に閉じ込められているようだった。

海側に並ぶ「舟屋」の造りは、王港町の風景のようでありながら、完全に生命力を抜き取られた陰画そのものであった。

一階の海へ向けて開かれた空洞を覗き込んだ小都華は、背筋を氷の刃で撫でられたような悪寒を感じる。そこには生活のための小舟や乾いた漁網はなく、海水をたっぷり吸って灰色に変色した白布が重く垂れ下がっている。布を留めているのは、魚の背骨を削り出して作ったような鋭い櫛であり、表面には安っぽいインクで道教の符籙めいた幾何学模様がびっしりと書き込まれていた。

奥の暗がりに安置された煤けた木彫りの像は、さらに奇怪だ。

丸みを帯びた輪郭は古い地蔵や恵比寿を思わせるが、足元の意匠は魚の尾を引く聖母マリアのように波打って彫り込まれている。

建付けの悪い窓枠から差し込む濁った光が、明確な逆さまの十字の影を描いて、そのキメラのような神体を雁字搦めに縛り付けていた。

小都華は自身の腕を抱いて強くさすった。



風に揺れる錆びた看板が、軋む音を立てる。

路地の奥から、数人の住民が歩いてきた。

彼らの姿は、一目で人間の枠から外れていると分かる異様さを放っていた。

皮膚はひどく青白く血の気が全くなく、両目の間隔が広すぎ、巨大な眼球が一度もまばたきをしない。膝の関節が外側に向いており、極端なガニ股で地面を這うように歩を進めてくる。軒先に並ぶ塩害で文字が掠れた表札は、ほとんどが「藤宮」という姓で埋め尽くされ、明治風の木札や現代風の亚克力が同じ家の柱に無秩序に重なって打ち付けられていた。

住民達は無言のまま、小都華達の横を通り過ぎようとする。

だが、すれ違う瞬間。彼らの焦点の定まらない眼球が一斉に不規則に動き、小都華と遥の身体をねっとりとは舐め回した。

それは外敵に対する警戒の視線ではない。首筋の細さ。髪の毛の長さ。骨盤の広さ。影の濃さ。衣服の下にある肉体の若さを、測り取るような、無機質ながら肉に溢れた欲望に満ちた品定め視線だった。

腐った海藻のような湿った息遣いが、小都華の首筋を撫でる。

一血が、還る。ええ器や…。

言葉には出さないが、まばたきをしない瞳と荒い息遣いだけで、彼女達を人格のある人間として少しも敬っておらず、内側に潮を注ぎ込むための胎として測っていることが小都華達は感じ取った。

脂ぎった中年男性に身体の間々までを見透かされるような、尊厳を根こそぎ剥ぎ取られる強烈な背徳感と生理的嫌悪感が、小都華の胃の腑を猛烈にせり上げさせた。

隣に立つ遥の呼吸が小さく震え、青い瞳が限界まで細められている。

このままここにいれば、飲み込まれる。

小都華は腕に立った鳥肌を隠すように、強引に明るく大きな声を張り上げた。「あー！なんかめっちゃ腹減ってきたわ！あそこに食堂の看板あるで！」

恐怖を人間の最も根源的な食欲で強引に塗り潰そうと、小都華は遥の手を引き、角に建つ古い藤宮食堂へと駆け込んだ。



王港町と蔭洲升とを隔てる赤レンガのトンネルの入り口。背後には網膜を焼灼するような王港町の真夏の日差しが降り注いでいるというのに、トンネルのアーチを境にして、空間は不自然なほど完全に切り取られた冷え切った静寂に沈んでいた。

月彦は片手にスマートフォンを、もう片手にデジヴァイスを握りしめ、トンネルの奥から這い出してくる灰色の霧を解析していた。

霧は単なる水蒸気ではない。肺に吸い込むと、塩水で腐食した古い電子基板のような、極めて化学的で生臭い悪臭が鼻腔の奥に張り付く。「…水蒸気じゃありませんね。」

月彦は、微かに吃音を交えながら、ひどく慎重に言葉を選んだ。「極度に圧縮された…海洋データに近いものです…通常のデジタルワールドとも、現実世界とも違う。言わば、隙間に挟み込まれた海のような空間…だと思います。」

傍らで白い日傘を差す伽夜子が、扇子で口元を覆いながら目を細める。「コード内容的に過去の実験事故の記憶や、海への根源的な恐怖…それに土着信仰とデータ汚染が結びついて、独自のキメラのような空間を形成している、ということかい？」

「ええ…でも。」

月彦の表情には、探求者としての納得ではなく、むしろ這い寄るような違和感への嫌悪が張り付いていた。

「おかしいんです。土着信仰やそういったコードが入り混じったと断定するには…こう…自然に入り混じったように混沌としていない…誰かが…意志が介在したような由緒の整い方が不自然すぎる。」

月彦は、スマートフォンに記録した画像データを開いた。

古書店で見つけた昭和の残光のページ、そして先ほどまで異常な波形を示していたログの記録。「我が弟ながら手癖が悪いねえ。」

「はは…、えっと…本物の伝承ならば、時代ごとの矛盾や、語り手による揺れ、禁忌が破綻した痕跡が必ず残ります。」

信仰って、もっと汚くほつれるはずなんです。

こういった空間は伽夜子さんも知ってる通りもっと混じりものばかりで混沌としてる筈なのに…。」

月彦は、トンネルの奥の暗闇を睨みつけた。怒りが重なり、彼の声から吃音が消え去っている。

誰かが、古いものを古く見せるために、用途に合わせて棚を並べ直している。

伽夜子は日傘の柄を握る手に微かに力を込め、冷やかな声で応じた。

だが、伽夜子は即座に理性を働かせ、自らの中に一つの重い留保を置いた。

「しかしね、月彦君…あくまで観測からの予測じゃないかい？」

もし向こうが本当に土地の神でその婚姻儀礼…いや、体裁を整えているだけでも、外部の忸い手である私達が理屈でそれを単純に壊すことも、民俗への敬意を欠く暴挙になり得る。

モラルをこの状況で語る気はないけど下手な介入は、呪い…実害として我々に手痛いしっぺ返しとしてくる可能性がある。

そのギラついた目…気持ちはお痛、程分かるけどしっかりとこちらまで道理を用意しないとじゃないかい？」

「…。」

(しかしなぜ小都ちゃんも？彼女はこの場所と縁も所縁もない…選定の理由が謎い不明瞭だねえ。)

その言葉は、彼ら自身の行動を縛る足枷となる、重い事実だった。

「…ふう、すみません。突入には座標の確固たるアンカー…、扉はこことして最初の段である条件…鍵になるものを探する必要があります…何か…繋がりがああるものさえあれば…」

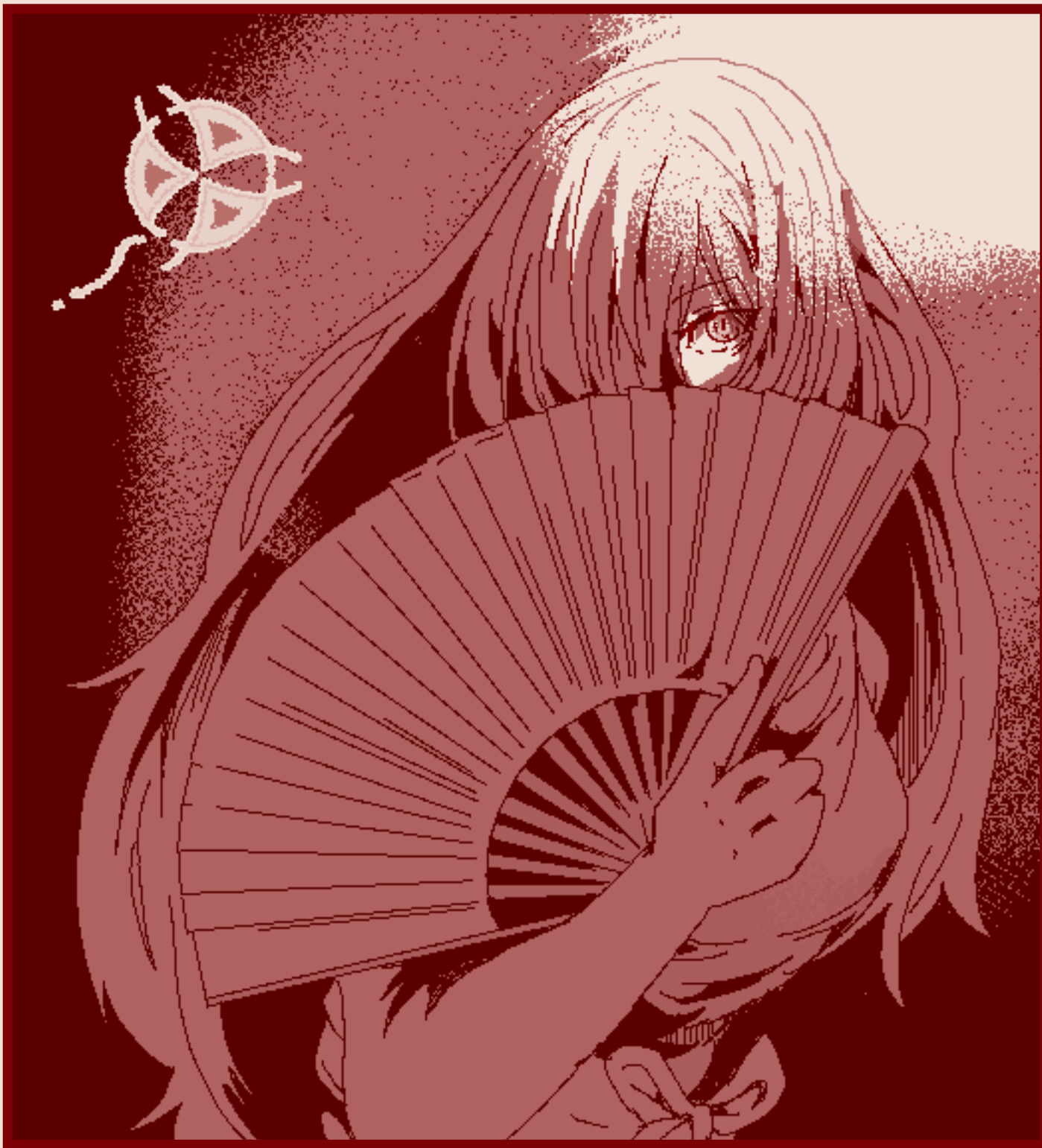
「ふむ…私は遥君の家へ戻ろう。ちょっと心当たりがあるしね。」

月彦君はベタモン君の治療とここの様子を見ていてくれたまえ。」

「…分かりました。」

伽夜子は日傘を翻し、急ぎ足で王港町の明るい路地へと戻っていった。

月彦は一人、トンネルから吐き出される冷たい霧の前に立ち、スマートフォンの画面に映る魚鱗状のノイズを忌々しげに見つめ続けていた。



伽夜子が遥の家を再訪した時、家の中の空気は先ほどよりもさらに重く、光の届かない井戸の底のようにひどく冷え切っていた。

玄関の引き戸を開けると、廊下の奥から祖母がゆっくりと姿を現す。

「あの…どちら様でしょうか？」

祖母の顔には、明確な戸惑いが浮かんでいた。

つい先刻前に言葉を交わしたはずの伽夜子のことを、全く覚えていない。

「先ほど伺った者ですよ。遥君が蔭洲升にいと仰っていましたが？」

伽夜子が微笑みを浮かべて尋ねると、祖母は不思議そうに首を傾げた。
「孫なら、自分の部屋におりますけど…。インスマス？王港町には、そんな地名はありませんえ。」

えっと…遥のお友達ですか？」

祖母の脳内から蔭洲升という単語そのものが削除され、遥が失踪しているという事実すら完全に上書きされている。

伽夜子は無言のまま、居間の仏壇の横にある写真立てへ向かった。

「ちょ…ちゅっと!?警察呼びますよ!」

「…。」

遥と両親が海辺で笑っている写真。

先ほどまではただ結露していただけだったその写真の中で、今、遥の姿だけが黒いインクを零したようにどろりと滲み始めている。

遥の顔の輪郭が崩れ、衣服の青い色が周囲の風景に溶け出し、汚い染みへと変わりつつあった。

単なる空間的な誘拐ではない。現実世界から、遥という少女の存在情報そのものを抹消している。

「…そういう仕組みかい。」

伽夜子は冷たい眼差しで黒く滲む写真を見つめ、懷から青白い呪符を一枚取り出した。

鋭い動作で御札を写真のガラス面へ貼り付けると、御札が淡く発光し、黒いインクの進行がギリギリのところで停止した。

「あっ…え…あんた…先会って…遥…遥は？」

「…。」

一時的な座標のアンカーの確保。だが、この薄氷のような猶予がいつまで保つかは、誰にも分からなかった。



立て付けの悪い木枠の引き戸が、重く湿った摩擦音を立てて開いた。
 路地の角に建つ『藤宮食堂』の暖簾をくぐった小都華と遥を迎え入れたのは、外の灰色の霧よりもさらに粘度の高い、淀んだ薄暗さだった。
 天井の隅で黄ばんだ古い扇風機が首を振っているが、羽が重い空気をかき回す摩擦音が虚しく響くばかりで、涼しい風は少しも肌に届かない。
 店内に他の客の姿はなかった。厨房の奥に、背中の曲がった店主が一人、まな板の前に立っている。
 小都華の背筋を、氷片を滑らせたような悪寒が撫でた。店主の皮膚は血の気を完全に失った青白色をしており、両目の間隔が人間の骨格としては異様に離れている。
 何より小都華の胃の腑を冷やしたのは、その巨大な眼球が、ただの一度もまばたきをしないことだった。
 「えっと…すみません。この…煮魚定食2つ欲しいんですが…」
 小都華が警戒を声の奥に隠して尋ねると、店主は無言のまま緩慢な動作で頷き、数分後に二つの皿をテーブルへ運んできた。
 皿の上に乗っていたのは、煮付けのように見える魚料理だった。
 だが、その魚の輪郭はひどく歪だった。深海魚のように頭部が異様に大きく、鱗は剥がれ落ち、身を浸している煮汁はまるで墨汁のように黒く濁っている。鼻腔を突いたのは、醤油や出汁の匂いではない。炎天下の波打ち際で腐敗した海藻の悪臭と、古い電子基板が焦げたような化学的な異臭が混ざり合った、酷く生臭い匂いだった。(うわ…これ、食べるん?)
 小都華が顔をしかめ、割り箸を手にとることすら躊躇う。
 だが、前に座った遥の様子が決定的におかしかった。
 遥の青い瞳は、虚ろに濁ったまま、黒い煮付けの皿をじっと見つめている。彼女の感覚器には、あの強烈な腐臭が届いていないかのようなようだった。
 遥は迷うことなく割り箸を割り、黒い魚の身へと箸の先を突き立てた。
 その瞬間。
 箸の先が触れた魚の身が、熱でも加えられたように小さく収縮した。
 完全に死んでいるはずの魚の繊維が、まるで自らの意志で呼吸をする生き物のように震えたのだ。
 「やめえや!!」
 小都華の腕が閃いた。
 硬質な破裂音が店内に響き渡り、遥の手から払い落とされた小鉢が床に叩きつけられる。陶器の破片が散らばり、黒い煮汁が床板の隙間へと染み込んでいく。
 床に落ちた魚の身は、まるで肺呼吸をする生き物のように数秒間だけ膨らみ、やがて動かなくなった。
 「アンタ、正気か!?こんな口入れたら、あかんて!」
 小都華の怒鳴り声に、遥は肩を震わせ、我に返ったように自分の手を見つめた。
 「…うち、なんでこんなもん…」
 「あっ…へへへ…あいやその…若いもののノリっちゅうか…」
 小都華が引きつった笑いを浮かべて厨房を見ると、騒ぎを起こしたというのに、店主は怒るでもなく、驚くでもなく、ただ虚ろな目で床に散らばった魚の残骸を見下ろしていた。
 そして、喉の奥から空気が漏れるような、湿った声で呟いた。
 「…まだ、潮が…合わなかったか…」
 「…出よ、遥さん。ここはメシ食う場所やないっ」
 何かを感じ取った小都華は遥の腕を強く掴み、逃げるように藤宮食堂を後にした。



藤宮食堂の引き戸を背後で閉めた瞬間、小都華は肺の奥に溜まっていた腐臭を吐き出すように大きく息を継いだ。
「急にどないしたん？ 遥さんゲテモノ喰いなん？」
「ちゃうけど…なんやろ…自然な食べものに思えたん…」
「…。」

外の灰色の霧は先ほどよりも密度を増し、視界の端を白く塗り潰していく。やがてそれは、皮膚にまとわりつく冷たい雨へと変わっていった。
「どわ！ 最悪やな!!!?? 踏んだり蹴ったりやんけ!？」
「小都ちゃんあっち…」

遥は小都華の手を握ったまま、霧の奥に瓦屋根の輪郭を見せていた建物へと駆け込んだ。入り口には、塩害で文字の欠け落ちた「郷土資料館」という木札が掲げられていた。

「すみません！ 誰かいませんかぁ！ いませんね！ 入りますね!!」

重いガラス戸を引くと、乾いた古い紙の匂いと防虫剤の香りに混じって、やはりあの海底の泥のような冷え切った空気が二人を迎え入れた。

館内には照明が点いておらず、外から差し込む濁った光だけが、所狭しと並べられた展示物を亡霊のように浮かび上がらせている。

一見すると、展示は非常に理路整然と整っていた。入口から順に「古代の海神」「浦島と帰還」「蛭子と葦舟」「潮迎え」「異国の祈り」「近代観光」という年代順のセクションに分かれている。

「慶長年間の潮迎え」とされるひび割れた木札の横には、明らかに明治以降の写真印刷の技術で刷られた少女の肖像が添えられている。

「享保の舟霊祭」と説明された色褪せた絵図には、舟霊の祠の背後に、まだこの町へ伝来していないはずの魚の尾を持つ聖母像が堂々と描かれている。

「明治十二年の寄り神記録」の展示には、既に昭和期の藤宮伊衛門の写真と同じ、黒光りする小舟が写り込んでいた。

「昭和三十年代の観光展示」のパネルには、古い伝承を紹介する口調で『選ばれし乙女は自ら潮へ還り、町に戻りの福を招いた』と美しい活字が掲げられている。

古い記録ほど、内容は短く、木札には「潮入る」「名戻る」「戸ひらく」など、何のための儀式なのか分からない単語だけが墨で記されている。

対して新しい記録ほど、文章は美しく装飾される。「海に選ばれた乙女」「古来からの婚礼」「家族再会の祝福」。

外部の読者が一切の疑問を抱かないように、すべてが綺麗に整えられている。
「…これ。」

遥が、部屋の中央に置かれた木造の小舟を指差した。

船首には不気味な幾何学模様が彫り込まれ、全体が黒い漆のようなもので塗り込められている。底からは、ねずみではない、もっと硬い小さな爪が内側から木を引っ掻くような、微かな摩擦音が絶え間なく響き続けていた。

その横に立てられ説明書きには『反魂舟・陀金様への供物。潮迎えの器を乗せ、境界を渡る』とあった。別の展示ケースには「潮の嫁」「戻りの乙女」「海の親へ名を戻す」という言葉と共に、婚礼の道具らしきものが並べられていた。

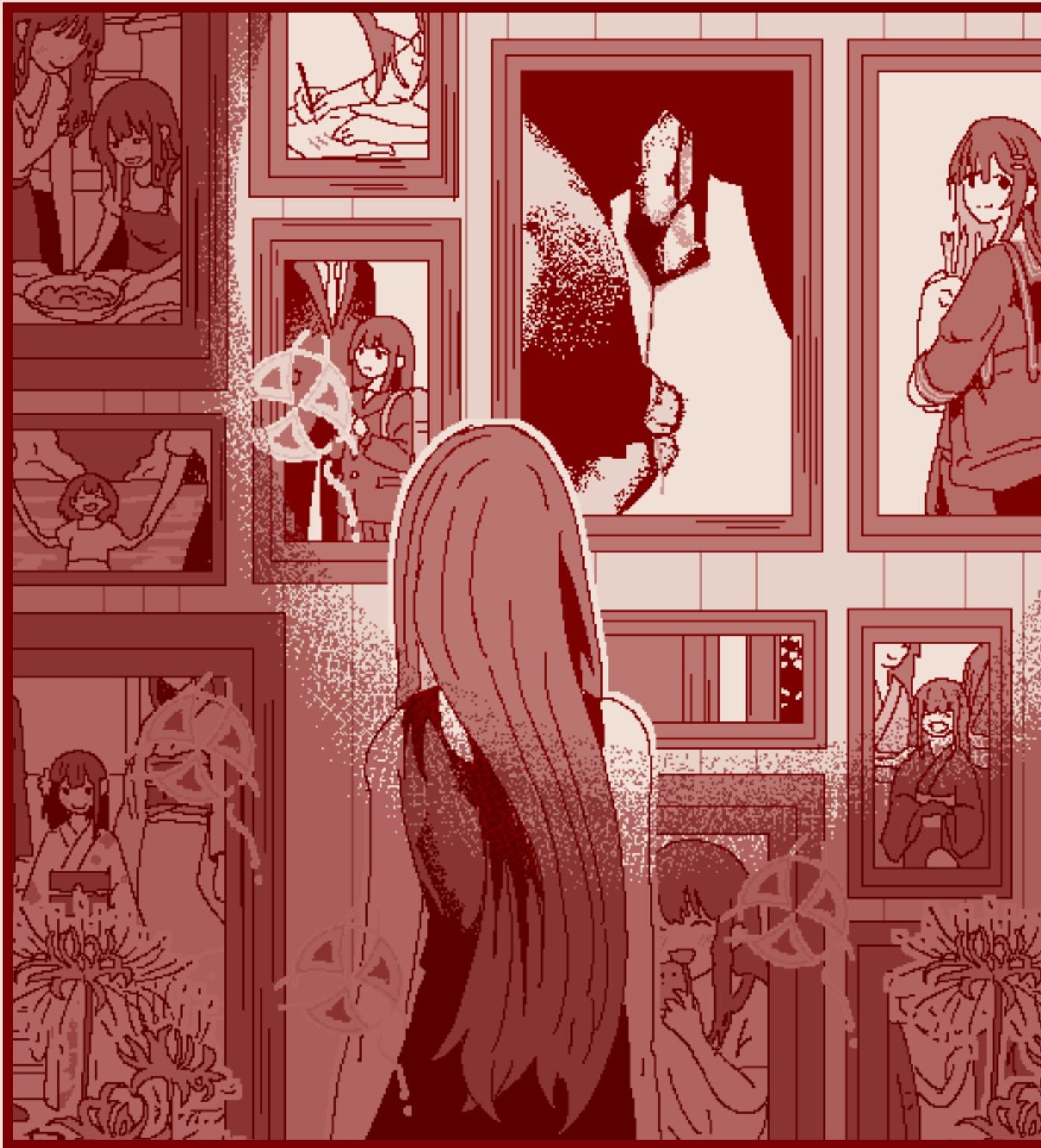
小都華は一瞬、それがハレの日の花嫁道具だと思いかけた。

だが、ガラスケースの中にあるのは、紅白の美しい祝具ではない。

黒く重たい腹帯、海水を吸って灰色に変色した濡れた白布、魚の骨を削り出した鋭い櫂、誰のものか分からない名札、潮で膨らんだ分厚い帳面、そして身体を測るための麻紐ばかりだ。

月彦のような知識がなくとも、小都華は身体の底から湧き上がる生理的嫌悪で理解した。これは、一般的なハレとしての結婚でも祭りでもない。

もっと機械的なシステムとしてのものであるのを本能的に理解した。



遥は、小都華が展示品の狂気に気づき息を呑んでいる間、吸い寄せられるように壁際の小さな展示スペースへと歩みを進めていた。

そこには、幾つかの写真が綺麗に飾られていた。

遥の呼吸が、微かに浅くなる。

震える指先が、冷たいガラスケースの表面をなぞる。

写真の端、額縁の裏側に回り込むようにして書かれた小さな添え書きの文字が、遥の網膜に焼き付いた。

(思い出した…。)

『3歳 遥はじめての海。』

『7歳 遥七五参 神の子から現世へ』

『12歳 選ばれし乙女の潮が満ちる』

その文字を認識した瞬間、遥の脳裏で、冷たい波の音が大きく崩れる音がした。
(…ウチはここで生まれたんや…。)

遥は、あの日蔭洲升に行く事を拒否し、海の神の怒りに触れ両親を海で失い、自分一人だけが生き残ってしまったのだ。

自分のせいで…。

両親がなぜ自分を蔭洲升に呼ぶのか分かった。

あの日…蔭洲升に帰り、乙女として、神の子を産むのを拒否したから。

自らの存在の輪郭が、黒いインクのように滲んで消えていく。

罪悪感から記憶の底に閉じ込めてしまったのか…逃げられない…あの鉛色の海に飲み込まれる。

逃げる事は許されない…両親におっ被せてきた借りを今こそ帰すべきなのだと。
「…いやや。」

遥の口から、掠れた息の音が漏れた。

足元の床板が、まるで水面のように揺らいで感じられる。自分が今立っている場所が、現実の地面なのか、それとも海の底に沈んだ泥の上なのか、もはや彼女の平衡感覚は完全に失われかけていた。



「なんや、顔色悪いで？」

不意に、横から響いた小都華の声は、このカビと塩気に満ちた淀んだ空間にはひどく不釣り合いなほど、張りがあって輪郭がはっきりとしていた。

遥が顔を上げると、小都華は腕を組み、眉間に深い皺を寄せてこちらを睨みつけていた。

「あんな気味悪い魚、食べ損ねてショック受けてるんか？　アホらしい。あんなん食べたら、確実にお腹壊すで？」

小都華の口調は乱暴だったが、その奥にある不器用な生活の手触りが、遥の凍りつきかけていた意識の表面に小さな波紋を広げた。

遥は、過去の少女達の写真が並ぶ薄暗いガラスケースからゆっくりと身を離し、展示室の暗がりになされた古い長椅子に腰を下ろした。

膝を抱え、自身の冷え切った腕を強く摩る。短く重い息を吐き出した。「思い出したんよ…全部…全部…違う…嘘や…そんなわけ…」

遥が自身の思い出したものを無理矢理否定しようとブツブツと言葉を吐き出し否定しようとしていた。

薄暗い空間に、蟬の鳴き声はない。

遠くから聞こえる、重く規則的な波の音だけが、遥の言葉の隙間をねっとりと埋めていく。

「帰りたい…おばあちゃん。」

小都華がしゃがんで遥を見据える。

「任しとき、ウチと仲間が責任持って遥さんばっちゃんとか帰したる。」

「アタシもいるの忘れないで欲しいんだよねえ。」

小都華の背後からクダモンが顔を出した。

「なんや、今まで顔出さんかったのにやけに強気やないか。」

「ここ気持ち悪くて…ちょっと小都華の影の中にゲロを…」

「なっ!? きっちゃないわ!」

小都華とクダモンのやり取りを見て遥が笑みを漏らした。

「ほんま、小都ちゃんおもしろ子やな。」

それを見て小都華とクダモンも笑い返す。

「おもしろいだけやないでめっちゃ頼りになるんやで、ウチめっちゃタフやし。」

ほら、行こか。さっさと出口探して帰ろや。」

小都華が立ち上がり遥に手を差し伸べる。

今度は、遥からもしっかりとその手を握り返した。



小都華に当てられ、遥の瞳に宿っていた暗い靄がわずかに晴れた。
だが、二人を包み込む郷土資料館の空気は依然として重く、古い木材が吸い込んだ腐海のような匂いが肺に纏わりついてくる。
「…ま、とりあえずここも長居する場所やないな。
出口…こっちに来るとき赤トンネル潜ったけどやっぱ行くならそこよろうけど…如何せん場所がなあ…。
遥さんはこっちどうやって来たん？」
「ウチも気付いたらここいたから…どうやる。」
「コトカ、あっちあの突き当りにあるアレ町図じゃない？」
「おっそれっぽいやないか、なっ？ウチの仲間めっちゃ頼りになるやろ。」
へへっと自慢げなクダモンを見て、せやね。と遥も笑いながら返した。
クダモンが促し、二人は暗い展示室の奥へと進んだ。
町図のある手前の部屋が、少しだけ開いた裏口の引き戸があった。
そこから漏れ聞こえてくるのは、低く、波の音に似た単調な呟き声だった。
小都華はそれに素早く気付き、足元にクダモンを控えさせ、引き戸の隙間からそつと外を覗き込んだ。遥もその背後から息を殺して覗き見る。
そこには、町ですれ違った灰色の服を着た住民達が十数人、等間隔で円を描くように集まっていた。
広場の中央には、先ほど展示室で見た『反魂舟』と同じ黒塗りの小舟が置かれている。舟の周囲には、ひどく生臭い匂いを放つ古い漁網や、深海魚の鋭い骨が幾重にも張り巡らされ、海水を吸った白布が天蓋のように重く吊るされていた。
誰も乗っていないはずの舟の底から、硬い爪が内側から木を搔くような音が、こつり、こつりと絶え間なく響き続けている。
住民達は何かを祈るように首を垂れているが、その口から漏れるのは明確な言葉の形を成していない。ただ、息を吸い、吐き出す音だけが、海鳴りのように響き合っている。
「…潮が、満ちる」
不意に、集団の中心に立っていた一人が、水底から響くような声で言った。
それは藤宮食堂で出会った、あの背中の曲がった青白い顔の店主だった。
「次の器は、ええ器や。あの黒い煮汁に、箸をつけた。腹ん中に、潮の匂いを覚えとる」
その言葉に、他の住民達の巨大な眼球が、一斉に不規則に動いた。まばたきをしていない瞳が、歓喜とも欲望ともつかない湿った光を放つ。
「戸口が開く。海の親へ名を戻す。」
「次の潮で、我ら陀金…を現世に。」
彼らの祈りは、表面上は古い婚礼の祝詞のようにも聞こえる。「戸口」「足跡」「名を戻す」という単語だけが延々と繰り返されていた。
小都華は、背筋を這い上がる圧倒的な悪寒と共に理解した。
「…行くで。」
小都華が遥を連れ、静かに音を立てず部屋の前を進んでいく。
声を殺しても漏れ出る息が致命的になるような自身の心臓の音も煩わしく思えた。
短い…時間にして5秒もあるかないか、だが小都華達には数時間にも及ぶような長さを感じた。
戸口の奥から自分達の視覚から完全に外れた瞬間、静かに小都華と遥が息を吐きだし達成感から静かに笑いあった。
「なるほどな…古いけど分かるっちゃ分かるわな。
こっから…北…やっぱトンネルから出るのが確実やな。
クダモンしっかり覚えとき。」
「うい〜。」
クダモンの緩い声と裏腹にデジモンの特徴であるデータ解析により精密に記憶した。
遥がえらいえらいとクダモンの頭を撫でるとクダモンも気持ちよさそうに喉を鳴らした。
弛緩した空気…しかし、それは一瞬で打ち砕かれた。生臭い腐臭が小都華達の鼻腔を犯し、次に聞き覚えのある、こでやなんども聞いた粘性のある水音が聞こえた。
「乙女が…胎が逃げる事は…許されぬ。」
どろりとした、海藻の腐臭を煮詰めたような声が引き戸の隙間から漏れた瞬間、小都華の全身の産毛が総毛立った。見つかった。
その絶対的な絶望を、彼女は持ち前の直情的な気性と怒りで強引に塗り潰した。
「クダモン…!!!! 進化や!!!!」
小都華の叫びに応え、クダモンの小さな身体から眩い進化の光が弾けた。
それは蔭洲升のじめじめとした湿気と暗闇を切り裂く、絶対的な神聖の輝きだった。
八枚の純白の翼が広がり、女性型の美しい天使、エンジェウーモンが郷土資料館の淀んだ空気に顕現する。



「だしゃああああああああ!!!!!!」

エンジェウーモンの放った強烈なが、迫り来る青白い住民の顎を打ち砕き、そのまま引き戸ごと資料館の壁面を粉碎した。

爆音と共に木材が吹き飛び、外の灰色の霧が室内に流れ込んでくる。

「おらぁっ！　ウちらに気安く触ろうとすな、変態どもが！」

小都華もまた、自らの両手の指の関節をバキバキと鳴らしながら、眼前の異形どもに向けて力強く啖呵を切った。

一撃で吹き飛ばされた蔭洲升の住民は、黒い泡となって床に崩れ落ちた。

優勢に見えた…だが、それはほんの一瞬の錯覚に過ぎなかった。

ぶくぶく、と音を立てて崩れた泡の中から、再びぬらぬらとした巨大な眼球が浮かび上がり、輪郭を再構築していく。

倒しても倒しても、彼らはデジタマには戻らず、ログを残さない泥の塊のように、ただ「器を孕ませる」という共同体の執念だけで這い上がってくる。

『器が、逃げる』

『次の潮が、もうすぐ合うのに』

資料館の外、灰色の霧が立ち込める路地から、ガニ股で跳ねるような足音を立てて、無数の住民達がゾンビのように群がり寄ってきた。

今まで静寂に包まれていた町が正体を見破られたかのように本性である獣の咆哮のような嗚咽のような不快な音を立てるサイレンが鳴り響いた。

彼らの巨大でまばたきをしない眼球は、エンジェウーモンの神聖な肉体や小都華の若々しい肢体を嘗めまわすように見ている。

「…チッ、キリがないわ！」

エンジェウーモンが舌打ちをする。彼女は背中の八枚の翼を羽ばたかせ、空へ逃れようとした。

だが…翼が動かない。蔭洲升の呪われた空気が、彼女の純白の羽毛に目に見えない重い海水を吸い込ませ、その飛翔を完全に封じ込めていたのだ。

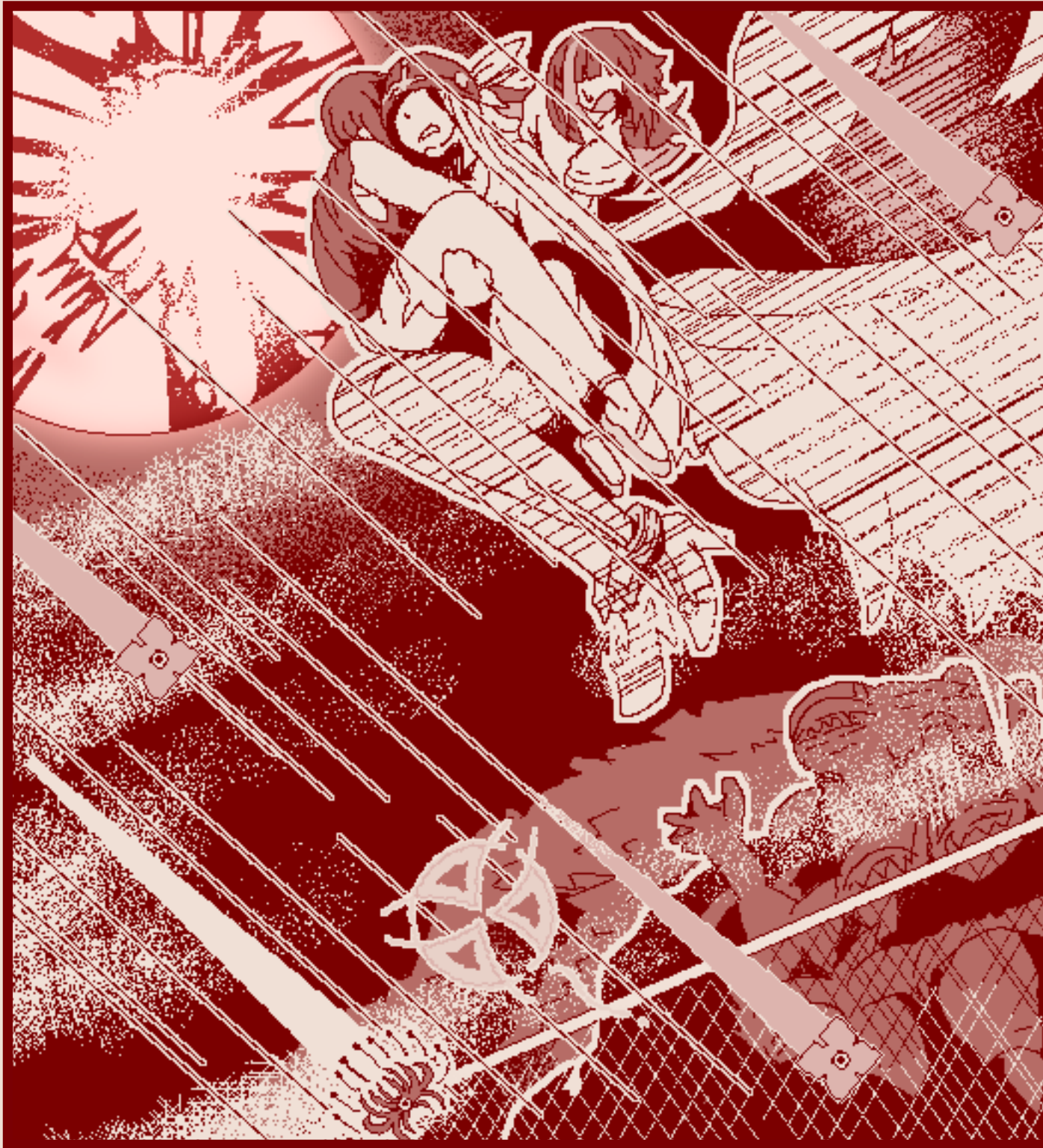
地の利は完全に相手にある。数の暴力と、呼吸をするたびに肺を犯す潮の匂いが、次第にエンジェウーモンを押し込み始めていた。

「チッ…！しゃあない、走るで！」

小都華は逃走を決断した。彼女は怯えてへたり込む遥の膝下に腕を差し入れて軽々とお姫様抱っこし、同時に背中へ小都華をおんぶする形で背負い上げた。

「しっかり掴まってな！」

エンジェウーモンは、迫り来る無数の青白い手を蹴り散らしながら、資料館の崩れた壁から灰色の霧が渦巻く外へと飛び出していった。



灰色の霧の中を、エンジェウーモンは疾走する。
目指したのは、王港町へと通じるはずのあの赤レンガのトンネルであった。
彼女のしなやかで力強い脚が黒ずんだ地面を蹴り、驚異的なスピードで入り組んだ路地を駆け抜けていく。

だが、背後からは墮子達が、カエルのような跳躍と異様な速度で執拗に追従してきていた。

『器よ』『名を戻せ』『胎を開け』

耳を塞ぎたくないような、読経とモデムノイズが混ざった卑猥な呪詛が、背中にねっとり張り付いてくる。

木立の中へ逃げ込んだ瞬間だった。木々の陰から、あるいは古い舟屋の隙間から、ぬめる住民達の腕が、まるでゴムのように異常な長さまで伸びて襲いかかってきた。「キショイ手え伸ばしてくんな!」

エンジェウーモンは遥と小都華を抱えながら、アクロバティックな身のこなしで無数の腕を躲けていく。だが、伸びてくるのは腕だけではなく。

住民達の大きく裂けた口からは、表面がザラザラとした肥大した舌が蛇のように飛び出し、さらに彼らの股間からは、どす黒い粘液を滴らせた太く蠢く陰茎が、意思を持った触手のように何本も伸びてきたのだ。

「きゃあっ!？」

エンジェウーモンの悲鳴が響く。

躲しきれなかった触手の一本が、彼女の太腿に絡みついた。鋭い爪を持った別の腕が、彼女の身体を覆う神聖な白いボディスーツに容赦なく爪を立てる。

絹を裂く音と共に、エンジェウーモンの衣服が破られた。

拘束を振りほどいて走り続けるものの、ダメージを受けるたびに彼女の衣装は無残に千切れていく。

左胸を覆っていた布が大きく裂け、豊満で弾力のある乳房が冷たい霧の中にこぼれ出た。

露出した先端のピンク色の乳首が、冷気と恐怖によってツンと硬く尖り上がる。

さらに、下腹部へと伸びてきた触手状の陰茎が、彼女の股間を覆う布を布地ごと引き千切った。

神聖な天使の証であるはずの肉体が、無残にも暴かれる。純白の肌の下で、柔らかな陰毛が外気に晒され、住民達の性的な眼球にじっとりと舐め回された。

誇り高き天使が、牝としての辱めを受け、羞恥に頬を赤く染めながらも走らざるを得なかった。

その姿は、見る者の情欲を異常なまでに煽り立てる官能的な美しさを放っていた。

前方に、かすかに赤レンガのトンネルのアーチが見えた。

「トンネルや! 気張りエンジェウーモン! あそこまで行けば…!」

小都華が背中で叫ぶ。助かるという期待が、三人の中に一瞬だけ光った。



「あぐっ…!」

泥に塗れ、咳き込む小都華達の周囲を、這い寄ってきた墮子達が完全に包囲した。巨大な眼球の壁が、彼女達を逃げ場のない絶望の檻へと閉じ込める。

『本命の器に、傷をつけるな。』

住民達の冷たい手が、泥だらけになった遥の四肢を掴み、乱暴に、しかし「商品」を扱うような正確さで押さえつけた。遥は抵抗しようとするが、圧倒的な臂力と粘液の重さに身動き一つ取れない。

『本命の前に、戸口を清める…。』

『予備の器も、潮に馴染ませる…。』

墮子達の視線が、遥から、泥に這いつくばる小都華と、衣服をほとんど剥ぎ取られたエンジェウーモンへと移った。

遥という本命の儀式の前に、彼女の友人達を「予備の肉」として凌辱し、その尊厳を徹底的に破壊することで、遥の心を完全にへし折る腹なのだ。

「何すんねん…触んな! キショいいんじゃ!!」

小都華が蹴りを放つが、複数の腕が彼女の足首と手首を冷たく強固に拘束し、大の字に押さえつけた。

小都華の着ていたシャツが、鋭い爪で無残に引き裂かれる。さらに、白いショートパンツと下着が一度に引き剥がされ、彼女の健康的で瑞々しい裸体が、死肉色の光の下に完全に晒された。

『ええ胎や…丈夫なややこを孕める。』

這い寄る墮子の股間から、血管の浮き出たどす黒い陰茎が、意思を持つ巨大なミズのようにぬるりと伸びてきた。

触手状に伸びたそれは、冷たい粘液を滴らせながら小都華の太腿を這い上がり、無防備な秘所の周囲を執拗にこすり始める。同時に、別の墮子の口から飛び出した肥大した舌が、小都華の露らになった胸の膨らみを舐め上げ、硬く縮み上がった乳首にザラザラとした感触を擦り付けた。

「ひっ…!? や、やめ……あぁっ!」

生理的嫌悪感で胃液が込み上げてくる。しかし、墮子達の愛撫はただの暴力ではなく、人間の神経構造を熟知したかのように正確で、執拗だった。

冷たい粘液が秘所の髪に塗り込まれ、敏感なクリトリスを触手状の陰茎の先端が細かく弾く。ザラつく舌が乳輪を責め立てるたび、小都華の脳裏を埋め尽くしていた怒りが、強制的に引き出される快感のノイズによって白く濁っていく。

「こんなバケモノ相手に…ウチ、何で…っ、あぁっ、あぁんっ!」

嫌悪しているはずなのに、若く健康な肉体は逆らえず、下腹部に甘い熱が灯り始める。腰が勝手に浮き上がり、秘所からは屈辱的な愛液が溢れ出し、泥と混じり合っていた。

一方、エンジェウーモンもまた、神聖な天使としての誇りを完全に粉碎されていた。

ほとんど全裸にされた彼女の四肢は、泥から突き出し、無数の腕によって地面に縫い付けられている。

彼女の豊かな尻が、無慈悲な手によって大きく左右に押し広げられた。

そこに狙いを定めたのは、最も太く、悍ましい粘液を垂れ流す触手状の陰茎だった。

「いや…っ、そこはダメ…! 汚らわしい…あぁっ!」

冷たく生臭い粘液が、これまで誰も触れたことのない無防備なアナルへと滴り落ちる。触手の先端が、肛門の細かい皺をなぞるように執拗に弄り回し、やがて、ぬるりと、その固く閉じられた括約筋の入り口を押し上げ始めた。

「あぁっ、あああぁっ……!」

アナルを開発されるという凌辱。神聖なデジコアの奥底が、汚泥で犯されていくような冒瀆的な感覚。しかし、その圧倒的な屈辱と痛みの裏側から、しびれるような背徳の快感が這い上がってくる。エンジェウーモンの白い肌は羞恥と情欲で真っ赤に染まり、大きく開かれた口からは、天使らしからぬ淫らな嬌声が絶え間なくこぼれ落ちていた。

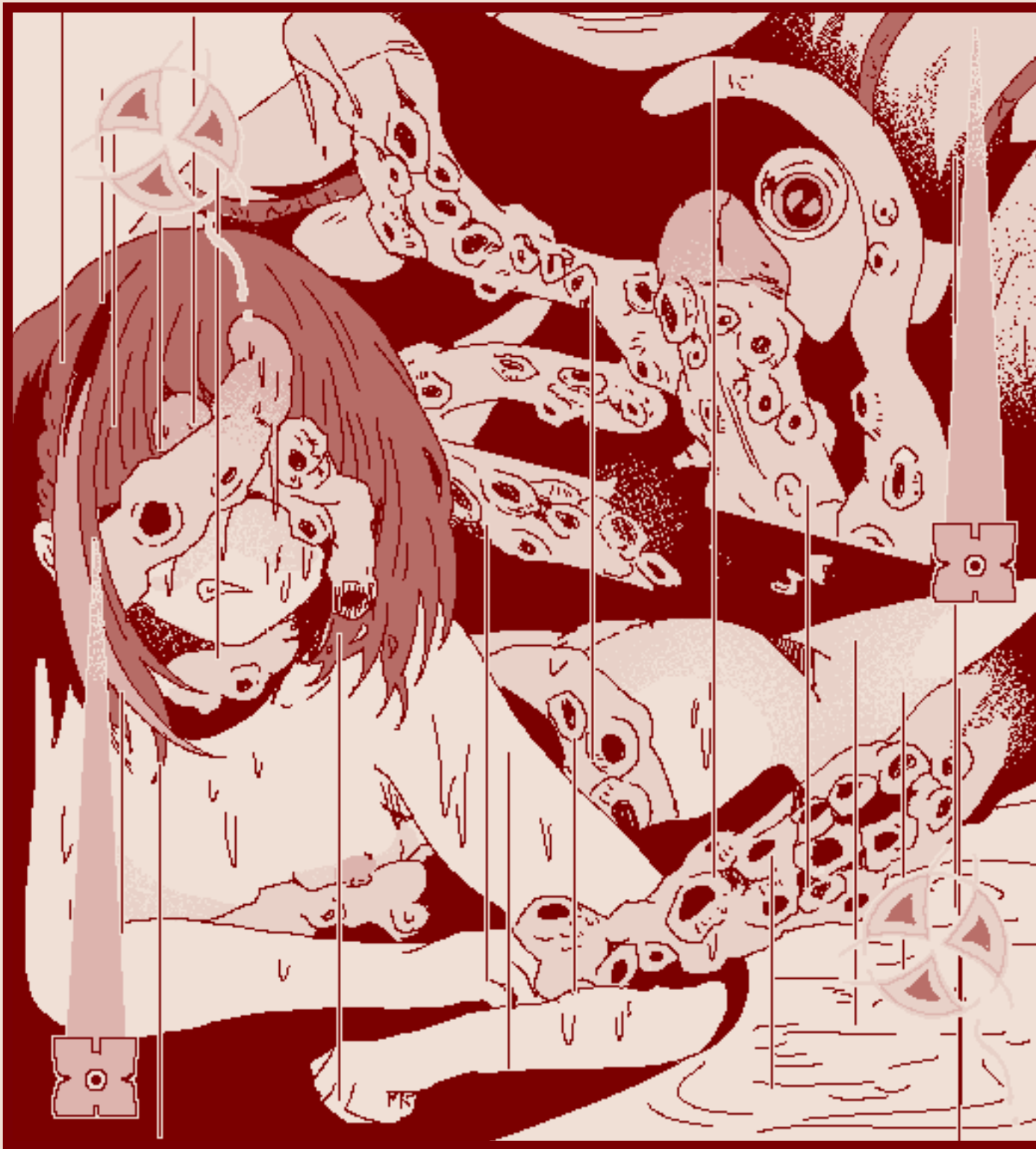
「やめて…お願い、小都ちゃん!!!ッ!」

泥に押さえつけられた遥は、目の前で繰り広げられる地獄に泣き叫んだ。

自分のせいで。自分がこの呪われた海に引かれてしまったせいで、大切な友人と相棒が、バケモノ達の慰み者にされ、そして抗えぬ快楽に屈服して墮ちていく。

住民達の生臭い息遣い、粘液が肉を叩く卑猥な水音、そして小都華達の甘い喘ぎ声が、遥の精神を漆黒の絶望で塗り潰していく。

もはや、ここには救いなどない。尊厳を削り取られ、ただ海へ帰るための「器」となるしかないのだという絶望が、遥の青い瞳から完全に光を奪い去ろうとしていた。



泥まみれになりながらも、小都華の瞳から反抗の意志は消えていなかった。
無数の腕に押さえつけられていた拘束が、エンジェウーモンへの凌辱へと住民たちの意識がわずかに逸れた一瞬の隙を突き、小都華は渾身の力で身体を捻った。
「離せやっ……!!」

水掻きのある青白い手を蹴り飛ばし、彼女は全裸のまま黒い砂浜を這いずるようにして逃げ出した。泥にまみれた健康的な白い背中と柔らかな臀部が、冷たい外気に晒されて粟立つ。王港町の神社で鍛えたしなやかな筋肉を軋ませ、ただひたすらに、あの生臭い地獄から遠ざかろうと泥を掴んで前へ進む。

だが、蔭洲升の海は、逃げる器を決して見逃しはしなかった。

「あぐっ……!？」

背後から、氷のように冷たく濡れた手が彼女の足首をガッチリと掴んだ。

人間の腕力ではない。万力のような力で引きずり戻され、小都華の身体が黒い泥の上を無惨に滑っていく。

「いやっ、やめろ……放せ!!」

必死に地面を引っ掻くものの、爪の間に泥が詰まるだけで抗うことはできない。彼女は強引に仰向けにされ、再び大の字に四肢を泥へ縫い付けられた。

彼女を見下ろすのは、表情を欠いた青白い住民たちの、巨大でまばたきをしない眼球の壁だった。

『元気な胎や。丈夫なややこを産む』

言葉の代わりに、気泡が弾けるような不気味な息遣いが落ちてくる。

住民の一人が、小都華の顔の上に覆い被さった。その股間からは、どす黒い粘液を滴らせる太い陰茎が、意思を持った触手のようにぬるりと蠢いて伸びてきた。

炎天下で腐った海藻と鉄錆を混ぜ合わせたような強烈な悪臭が鼻腔を犯す。

「んぐっ……!? やっ、んんっ!!」

青白い手が小都華の顎を外れんばかりの力で掴み、強引に口をこじ開けた。そこへ、熱を持った生臭い触手が無慈悲に挿入される。

舌の根を押し潰し、気管を塞ぐように深く突っ込まれた触手が、口腔内でまるで別の生き物のようになぐり、ザラついた表面で粘膜を削るように擦り上げた。

「おえっ、がふっ……んぐ、ちゅるっ、んんんっ!!」

生理的な嘔吐感が胃の腑から込み上げるが、顎を固定されているため吐き出すこともできない。気道を塞がれる息苦しさ、異物を無理矢理しゃぶらされているという圧倒的な屈辱。小都華の口角から、粘り気のある涎と怪異の体液が混ざり合ってだらしく垂れ落ちる。

だが、凌辱はそれだけでは終わらなかった。

上半身を犯され、身悶えする小都華の無防備に開かれた股間に、別の住民の巨大な触手状の陰茎が迫っていた。

それは挿入こそしなかったものの、たっぷりと粘液を纏った太い先端を、小都華の秘所の入り口とアナルの細かな皺に同時に押し当て、強烈な圧で上下に擦り上げ始めた。いわゆる素股の要領で、彼女の最も敏感な部分を執拗に蹂躪し始めたのだ。

「んんっ……!! ひぎいっ、あ、ああんっ!!」

泥だらけの太腿が痙攣し、腰が勝手に跳ね上がる。

筋肉フェチで脳筋気味、常に「怒り」と「物理」で解決しようとしてきた気の強い少女の自尊心が、化け物がもたらす強制的な快楽のノイズによってドロドロに溶かされていく。

抵抗しようにも、クリトリスを的確に弾き、アナルの髪をこする卑猥な摩擦熱が、彼女の健康的な肉体に抗えぬ下劣な快感を与えてしまう。

「ううっ……いや、ウチ、こんなバケモノ相手に……っ、あああっ!!」

感じたくなどない。それなのに、下腹部の奥で甘い熱が渦を巻き、秘所からは彼女の意志とは無関係に、とめどない愛液が溢れ出していく。自らの体が分泌した恥ずかしい蜜が、太腿を伝って冷たい黒泥と混ざり合う。

誇り高き意志が肉体の快楽によって屈服させられる悔しさと、尊厳を根こそぎ剥ぎ取られる絶望。小都華の大きな瞳から、大粒の悔し涙がボロボロと溢れ落ち、泥まみれの頬を濡らした。

『奥まで、潮を通す……』

口腔を犯され、下半身を責め立てられ、完全に抵抗の意志を砕かれかけた小都華。

ついに、秘所の入り口で滑っていた極太の先端が、その奥にある処女膜を破らんと、ぬめりを帯びて垂直に押し当てられた。

(アカン……誰か、助けて……月彦……っ!!)

絶望に目を固く閉じた、最悪の瞬間だった。



「その人から離れろォォォォ!!」

ガラスを硬い金属で叩き割ったような、耳障りな破裂音が空間を引き裂いた。小都華の秘所を貫こうと覆い被さっていた住民の頭部に、灰色の霧を突き破って飛来した何かが、深々と突き刺さったのだ。
「ギャッ…!？」

住民の青白い頭蓋が、まるで熟れた果実のように無惨にカチ割られた。頭蓋に食い込んでいたのは、デジモンの組成を破壊する赤い呪符がびっしりと巻き付けられた、一振りの重厚な鉦だった。

呪符から青白い閃光が弾け、頭を割られた住民は血の一滴も流すことなく、どろりとした黒い泡となって小都華の身体の上から崩れ落ちた。

空間の裂け目から響いたのは、獣のような、殺意に満ちた低い咆哮だった。そこに立っていたのは、普段の猫背でオドオドした、吃音混じりの弱気な少年ではない。怒りで目を血走らせ、圧倒的な暴力の気配を全身から立ち昇らせた修羅、夜光月彦だった。

自分が誰よりも大切に想っている少女が、悍ましい泥と化け物どもに蹂躪され、涙を流している。その光景が、月彦の中にある理性という箍を完全に焼き切っていた。「かはっ、げほっ、はぁっ……!」

口内を犯していた触手が消え、小都華は激しく咽せながら新鮮な空気を肺に吸い込んだ。涙で霞む視界の先、トンネルから続く空間が、物理的な質量を伴って縦に引き裂かれているのが見えた。

月彦は裂け目から黒い砂浜へと飛び降りると、崩れた泥の中から鉦を引き抜き、迫り来る別の住民の胸ぐらを掴んで無慈悲に刃を叩き込んだ。

「月、彦…?」

小都華が震える声でその名を呼ぶ。月彦の背中が、今の彼女には何よりも頼もしく、巨大に…そして、恐ろしく見えた。

だが、獲物を横取りされた住民と達が、怒り狂ったように月彦へと一斉に群がり寄る。「ふふ…我が弟を怒らせるとはね。後悔する暇も与えないよ」

月彦の背後、空間の裂け目から、白い日傘を畳んだ伽夜子が優雅な足取りで現れた。彼女は薄く青みがかった瞳を冷酷に細め、扇子をバサリと鋭く開く。「ブシアグモン殿! ここは手加減無用、塵一つ残さず焼き払いたまえ!」

「応よ!!!」

伽夜子の叫びに応え、ブシアグモンの身体が爆発的な炎の渦に包まれた。超進化の光が蔭洲升の死んだ空気を焦がす。炎の中から姿を現したのは、一回りも二回りも巨大化した竜人型の武者、完全体デジモンゴウカガクグレイモンだった。

背中から猛烈な業火を噴出させ、左手は巨大な炎の手と化している。そして右手には、緩く包帯の巻かれた巨大な斬馬刀が握られていた。

「我は炎、我は刃! 貴様ら如き有象無象、燃え滓すら残さん!!」

ゴウカガクグレイモンが地を蹴り、巨大な斬馬刀を上段に構える。

「万象一閃灰塵とかせ!!!」

振り下ろされた斬馬刀から、業火の泥流と見紛うばかりの凄まじい斬撃の波が解き放たれた。

炎の波濤が黒い砂浜を舐め尽くし、月彦と小都華を囲んでいた住民の群れを瞬時にして呑み込む。

断末魔すら上げる間もなく、彼らを構成していた不純なデータが圧倒的な熱量によって炭化し、文字通り塵となって吹き飛ばされた。炎の熱波が、肌を刺すような冷気と腐海のような悪臭を強引に蒸発させ、周囲にぼっかりと安全な空白地帯を作り出す。

その炎の壁の隙間を縫うようにして、月彦が泥だらけの小都華のもとへと駆け寄ろうと瞬間、トンネルの境界から呼ばれざる客を除外するように蔭洲升の海の水が触手のように溢れ出て月彦達を絡め捕り、小都華達と分断しようとした。

「…ッ!!!」



「小都華さん!!」

「ええから! ウチはええから!!! 遥さんを…!」

空間が締まる瞬間、コヅキガルルモンが回収した遥を月彦が現実側に引っ張り上げた。

「そでれええ…。」

空間が閉じ、小都華のみが蔭洲升に取り残された…。

だが、月彦は一秒の迷いもなく、空間に再び自らの右腕を深く突っ込んだ。

黒い水が月彦の腕を焼き、皮膚を溶かすような激痛が走る。それでも彼は顔をしかめるだけで、小都華の手首をがっちりと掴み、強引に引き引き抜いた。

小都華の指先が月彦の手を握り返した瞬間、言葉は要らなかった。

「月彦…!」

小都華は、彼の名を呼び捨てて叫びながら、トンネルのこちら側へと転がり込んだ。

背後で、あの生臭い波の音が狂ったように荒れ狂い、空間が完全に閉ざされる。

だが、トンネルへ飛び込む直前、伽夜子の鋭い視線は、遥の黒い衣服の裾から滴り落ちる、墨汁のように黒い水滴を見逃さなかった。

トンネルの冷たい闇を抜け、暴力的なまでの真夏の光が視界を白く染め上げた。

「はあっ…、はあっ…!」

王港町側の入り口に転がり出た小都華は、コンクリートの地面に両手をつき、むさぼるように空気を吸い込んだ。

肺に入ってくるのは、あの腐った海藻の匂いではない。アスファルトの熱気と、潮風の爽やかさ、そして鼓膜を揺らすような蝉時雨だ。

「…戻って、これたんやな…。」

小都華が顔を上げると、真っ青な空と、白く輝く波止場が広がっていた。生きている世界の色だ。

「ベタモン!」

遥がぐったりとしているベタモンを抱きかかえた。

「よう…へへ、案外元気そうじゃねえか。俺も見た目と違って…っ案外元気だぜ。」

「こん子は本当に…無茶して。」

月彦が無言で小都華に来ていた羽織を着せる。

「お…おうあんがとな。なんや、その顔今にも泣きそやないか。なんで君が泣きそなんやねん!! ってな。いや、ウチは案外大丈夫やったで! ウチひとりでもあんな連中全員チンポ引き千切ってやったんにな!」

見られず笑いかけろ小都華を月彦が抱きしめ頭を撫でた。

「いいんです…。もう大丈夫ですから。」

張り詰めていた緊張の糸が一瞬にして切れた、小都華は普段の強がりも忘れ、月彦にすがりつくように抱きついて泣き崩れた。

「ぐすっ…怖かった…ほんまに、怖かった…!」

数秒後、我に返った小都華が顔を真っ赤にしてバンッと月彦の胸を押し返し、「な、なんやねん! ちょっと足滑らせただけやし!」と照れ隠しに怒鳴ったが、月彦の手もまた小刻みに震えていることに気づき、二人は互いに視線を逸らした。

「怪我はないかい、小都ちゃん、遥君」

伽夜子が日傘を差し掛けながら、優しく声をかける。

遥は地面に座り込んだまま、腕の中のベタモンを強く抱きしめ、無言で頷いた。

伽夜子は、トンネルの入り口近くにある小さな地藏と祠の前に歩み寄り、懐から青白い御札を取り出した。

「少し、応急処置をしておこうか。」

伽夜子は、御札を祠に打ち付けた。札が青白く燃え上がり、トンネルから漏れ出していたじめじめとした湿気が、一時的にフッと引いていく。

「ふむ。これで、表層の潮筋は塞げたはずだよ。土地の寄り神も、まあ少…静まっただろう」

伽夜子の言葉に、小都華は安堵の息を吐く…だが、月彦だけは、視線を遥の足元に向けていた。

札が効いたというのに、遥の衣服から落ちる黒い水滴が、依然としてアスファルトに小さな染みを作り続けている。

(…おかしい。寄り神を鎮める手順を踏んだのに、干渉がまだ残ってる…?)

月彦の胸中に、決定的な違和感が芽生え始めていた。

「とりあえず、安全な場所まで移動しよう。」

せっかく戻って来たのに熱中症でみんな病院送りになったなんて笑い話にもならないからねえ。」

伽夜子の提案に、一行は足を引きずるようにして、賑やかな商店街へと向かった。

行き交う人々、氷を砕く音、漁師の威勢のいい声。

日常の喧騒が、先ほどまでの異常な静寂と死の気配を、少しずつ中和していく。

「あ〜これや! これ! これが生きてるってもんや!」

小都華は冷えた缶ジュースを自動販売機で買い、ひんやりとしたアルミの感触を頬に押し当てて、ようやく自分が生きて現実世界にいることを実感した。